山形県埋蔵文化財センター調査報告書第157集

上ノ山館跡発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

うえ　の　やま　たて　あと

上ノ山館跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第157集

2007

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

上ノ山館跡（うえのやまたてあと）

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第157集

平成19年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

財団法人山形県埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として平成５年に設立され、以来、多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、山形県埋蔵文化財センター調査報告書第157集として、一般国道13号線上山バイパス改築事業に伴って実施した上ノ山館跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

上ノ山館跡は自然の丘陵を利用して構築された館跡で、調査した遺跡の範囲は10,000㎡に及びます。今回の調査では丘陵の北側に階段状の帯曲輪が検出され、隣接する中山城跡を防備するための前線基地であったことが明らかになり、この地域の歴史を知る上で大変貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解読の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し、御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした作業員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　山　口　常　夫

本書は、一般国道13号線上山バイパス改築事業に係わる「上ノ山館跡」の発掘調査報告書である。
既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
出土遺物・調査記録類は、報告書作成後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	上ノ山館跡（うえのやまたてあと）
遺跡番号	207－002
所在地	山形県上山市大字中山字上ノ山
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査受託者	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成17（2005）年４月１日～平成19（2007）年３月31日
現地調査	平成17（2005）年５月17日～平成17（2005）年11月４日
調査担当	調査第一課長　野尻　侃
	（調査第三課長　渋谷　孝雄）
	（主任調査研究員　氏家　信行）
	主任調査研究員　小林　圭一（調査主任）
	調査員　黒坂　広美
整理期間	平成18（2006）年４月１日～平成19（2007）年３月31日
整理担当者	調査第一課長　野尻　侃
	調査研究主幹　長橋　至
	主任調査研究員　小林　圭一（調査主任）
調査指導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室
調査協力	村山教育事務所
	上山市教育委員会

凡　例

1　本書の編集及び執筆は、小林圭一が担当した。

2　遺構図に付す座標値は、世界測地系に基づいている。方位は座標北を表し、高さは海抜高で表す。

3　遺構・遺物実測図の縮尺、網点の用法は各図に示した。

4　土層図の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版基準土色帖』によった。

5　発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただい(敬省略、五十音順)。

阿子島功　大橋康二　加藤和徳　多田和弘

6　委託業務は下記の通りである。

基準点測量業務　（株）山形測量設計事務所

遺構測量業務　（株）セビアス

図版編集業務　（株）セビアス

目　次

Ⅰ　調査の概要
　1　調査に至る経過……1
　2　遺跡の立地と環境……1
　　A　地理的環境
　　B　周辺の遺跡
　3　調査の経緯と概要……13
　　A　調査区の配置
　　B　グリッドの設定
　　C　調査の経過
Ⅱ　北調査区の成果
　1　北調査区の概要……20
　2　南曲輪について……21
　3　北曲輪について……22
　4　北調査区最上段……38
　5　検出された遺構……45
　　A　1号土坑
　　B　1号石組跡
　6　出土遺物……45
　　A　石器・石製品・銭貨
　　B　土器・磁器・瓦類・鉄製品
Ⅲ　南調査区の成果……55
Ⅳ　調査の総括……57
引用文献……57
付編　上ノ山館跡発掘調査報告書付録CD－ROM操作マニュアル

表

表1　上ノ山館跡周辺の遺跡……6
表2　石器観察表……53

図版

第 1 図　調査概要図……2
第 2 図　上ノ山遺跡周辺及び米沢盆地地形分類図……3
第 3 図　上ノ山館跡周辺の遺跡……5
第 4 図　上ノ山館跡周辺地形分類図……8
第 5 図　上ノ山館跡周辺表層地質図……10
第 6 図　表層地質図凡例……11
第 7 図　上ノ山館跡現況図……15
第 8 図　グリッド配置図……17
第 9 図　北調査区縄張り図……23
第 10 図　上ノ山館跡調査区測量図……25
第 11 図　上ノ山館跡南調査区……27
第 12 図　上ノ山館跡北調査区……29
第 13 図　1号土坑……31
第 14 図　1号石組跡……33
第 15 図　北調査区南曲輪ベルト土層断面図……35
第 16 図　北調査区中央曲輪ベルト土層断面図……37
第 17 図　北調査区北曲輪B列土層断面図……39
第 18 図　北調査区北曲輪D列土層断面図……41
第 19 図　北調査区最上段トレンチ土層断面図……43
第 20 図　北調査区遺物出土状況……47
第 21 図　遺物実測図……49
第 22 図　遺物実測図……50
第 23 図　遺物実測図……51
第 24 図　遺物実測図……52
第 25 図　遺物実測図……53
第 26 図　遺物実測図……54
第 27 図　上ノ山館跡縄張り図……56

写真図版

カラー写真図版1　北曲輪南半部完堀状況・北曲輪完堀状況
カラー写真図版2　遺跡遠景・南曲輪作業風景
写真図版1　調査区内伐採木残存状況ほか
写真図版2　遺跡近景・遺跡遠景
写真図版3　北曲輪清掃終了状況
写真図版4　調査区全景
写真図版5　調査区全景
写真図版6　調査区内鉄板敷設状況ほか
写真図版7　北曲輪A～B列面整理風景ほか
写真図版8　北曲輪C～E列面整理風景ほか
写真図版9　北曲輪北半部完堀状況
写真図版10　北曲輪南半部完堀状況
写真図版11　北曲輪完堀状況
写真図版12　南曲輪完堀状況
写真図版13　南曲輪完堀状況ほか
写真図版14　最上段平坦部トレンチ断面実測図作成ほか
写真図版15　最上段平坦部トレンチ完堀状況ほか
写真図版16　調査区及び周辺の航空写真
写真図版17　出土遺物
写真図版18　出土遺物

Ⅰ　調査の概要

1　調査に至る経過

山形県内の内陸部を縦走する国道13号線は、県内交通網の大動脈としての役割を担っている。しかし上山市と南陽市を結ぶ区間の平地は、山間の細長い地形をなしていることから迂回路がなく、慢性的な交通障害が生じていた。そこで上山市と南陽市を結ぶ区間のバイパス改築事業（上山バイパス）が計画された。　**上山バイパス**

事業の計画を受けて、山形県教育委員会では予定路線について埋蔵文化財の有無を確認する遺跡詳細分布調査を行うと共に、埋蔵文化財の取り扱いについて、関係機関と遺跡の保存について慎重な協議を重ねた。その結果事業計画の変更は困難であり、やむを得ず記録保存することで協議が整い、2004年に山形県教育委員会による試掘調査が実施され（山形県教育委員会2006）、その成果に基づき財団法人山形県埋蔵文化財センターが国土交通省の委託を受けて、発掘調査を実施することになった。

上ノ山館跡は、山形県教育委員会が実施した中世城館跡調査の結果、1995年度に中近世の城館跡として周知の遺跡に登録された（山形県教育委員会1996）。遺跡の南端の横川を挟んだ南には、戦国期の城郭である中山城跡が位置しており、中山城を主城にしてその前衛の要塞として上ノ山館跡が構築されたと考えられる。今回の調査では階段状の帯曲輪を多数検出したが、自然の丘陵を削って成形され、狭小な段が幾重にも巡らされており、中山城跡を防備するための支館としての性格を確認することができた。　**中山城跡**

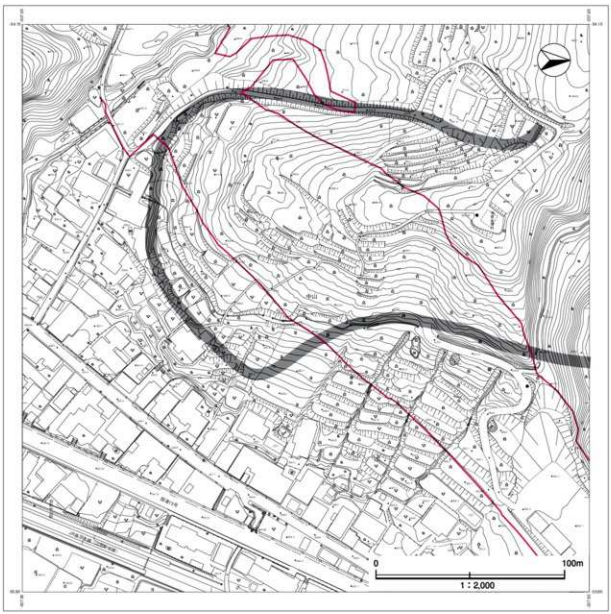
なお、上ノ山館跡は「上ノ山楯跡」と記される場合も多いが、山形県教育委員会からの指導により、『山形県中世城館遺跡調査報告書　第２集（村山地域）』（山形県教育委員会1996）の「市町村別城館遺跡一覧表」に倣って「上ノ山館跡」に統一した。　**上ノ山楯跡**

2　遺跡の立地と環境

A　地理的環境

上ノ山館跡は、上山市大字中山字上ノ山に位置している。中山地区は上山市の南西端、上山盆地と米沢盆地の間にある山間の細長い平地（中山盆地）へ当たる。山形方面と米沢方面とを結ぶ交通の要衝で、現在は国道13号線と奥羽本線が併走しており、嘗ては東置賜郡中川村に含まれ、置賜と村山の郡境となっていた。しかし水系では、山形盆地で最上川と合流する須川の水系に属しており、分水界が境界とならない特異な地域となっている。　**中山地区**

中山盆地は、川樋（かわひ）盆地（川樋低地）に源を発し北流する前川に沿って形成された、東西0.3～1.5km、南北約４kmの狭小な盆地である。北端は上山盆地の西南端から西に２km入った山間低地（川口地区）を経て南方に屈折した狭窄部（掛入石（かけいりいし））に当たり、南端は更に北西方向に屈折する岩部山付近までの範囲にある。低地部は標高240～265mの範囲にあり、その周囲は標高　**中山盆地**



第1図　調査概要図

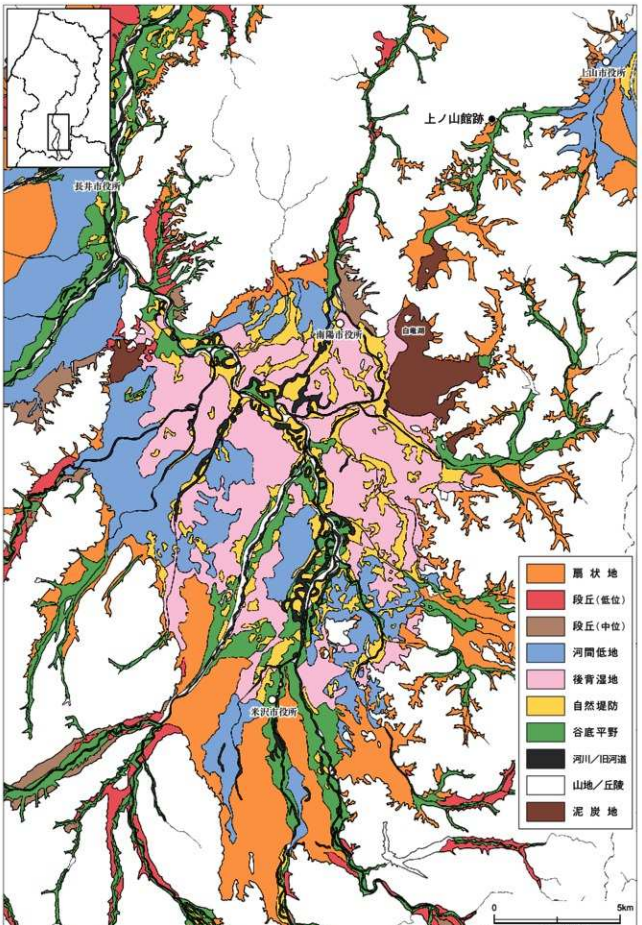
500～700mの中起伏山地で囲まれるが、東側が奥羽山系、西側が白鷹山系となっており、本低地を挟んで両山系が分かたれている。支流は前川に向かってほぼ直交するように東西方向から合流しており、山脚には崩壊堆積物による緩斜面が発達し、開析された高位段丘や丘陵が島状・舌状に残され、起伏に富んだ地形となっている。

白鷹山系片倉山

上ノ山館跡は、白鷹山系片倉山の山麓が北から南に突き出た半島状の丘陵に構築されており、遺跡の標高は260～295mを測る。北端をかれい沢、南端を横川で画されており、丘陵頂部（標高295m）には、現在黄金神社が移築されている。遺跡付近の山地の表層地質は、火山性岩石

地すべり地帯

（酸性軽石凝灰岩、泥岩及び凝灰質泥岩）の岩相から成り立っており、地すべり地帯（第三系の地すべり）となっている。調査区内にも土砂崩落の痕跡が観察され、地すべりが頻発した地域であり、調査区中央東側に地割れが認められたことから、該域は発掘調査区域から除外した。



第2図　上ノ山館跡周辺及び米沢盆地地形分類図

亜炭層　中山地区の白鷹山系の山裾には、亜炭層（中山層）が形成されている。同地区では近年まで亜炭の採掘が行われており、家庭燃料として利用されていた。上ノ山館跡付近のバイパス造成の工事現場でも、切り取り面に亜炭の堆積層の露頭が確認され、滞水層をなしていた。その形成年代は特定されていない（阿子島・米地ほか1983）が、新第三紀鮮新統に属する地層と考えられる。

掛入石　道跡の北東には、掛入石が存している。掛入石は「かけりいし」・「かけいりいし」とも呼ばれ、中山地区北端の置賜郡と村山郡の境界にある安山岩質の巨石（第５図）で、巨石に生える１本の桜は西の枝は置賜領、東の枝は村山領とその美を競ったと伝えられている。また岩の中に４間５尺の洞窟が存していたとも言われ、享保２年（1712年）の絵図には「横八間四尺・長サ八間五尺三寸・内長四間五尺・高四間二尺」(伊藤ほか2003）と記されている。しかし1896年、奥羽本線鉄道敷設工事で石の基礎が大きく剥削され、半分以下の大きさになったと言われており、国道13号線と奥羽本線に挟まれている。現在掛入石は上山市の史跡に指定されているが、今回の国道13号線バイパス改築工事によって直ぐ西側まで土砂が掘削されており、景観を大きく変えている。

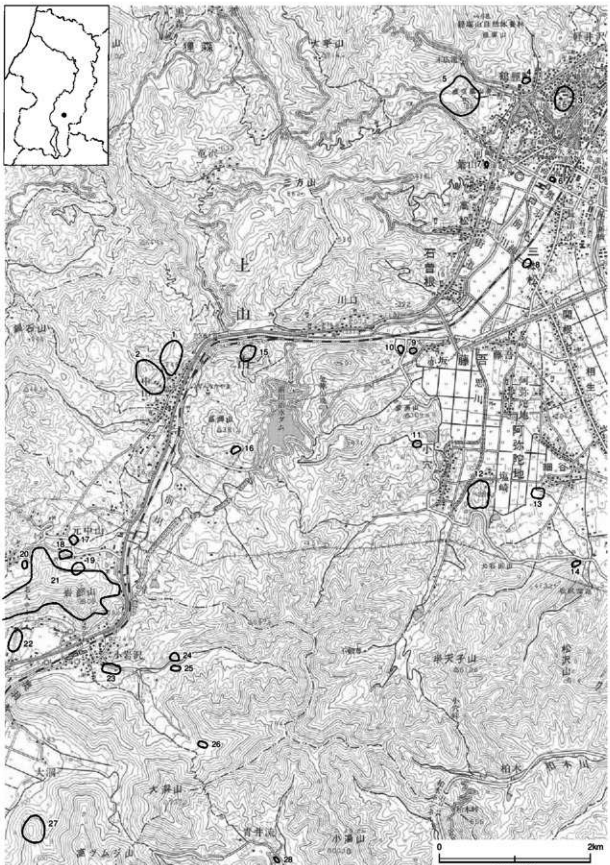
上ノ山館跡付近の原植生は、沢筋の急斜面等に限られるが、主にコナラ、クリ、クヌギ、カスミザクラ等の高木に覆われ、その林床にはリョウブ、ナツハゼ、チマキザサ、ヤマツツジ、ヌルデ、オオバクロモジ、ヤマウルシ、レンゲツツジ、タラノキ等の低木、またアキノキリンソウ、スイカズラ、アカネ、ノコンギク等の草本が点在する林分であった考えられる。特に沢筋にはミズキ、クマノミズキ、ケヤキ等の高木林が発達したと考えられるが、現在それ等の大部分は伐採され、スギが植林されている（伊藤ほか2003）。

川樋盆地　地質調査が不十分な中山盆地に対し、南接する川樋盆地については詳細な調査が実施されている（中山・宮城1984）。川樋盆地は南北約３km、東西約1.5kmで、東が膨らんだ長円形を呈しており、低地部の標高は274～290mを測る。周囲を標高500～700mの中起伏山地で囲まれ、山脚には緩斜面が発達している（第４図）。盆地の中央には泥炭層が厚く堆積しており（最大層厚は不明）、河川の氾濫に起因する砂礫や水の供給が殆どなく、長期間にわたる泥炭がより良好な状態で残されている。この泥炭層について深さ16mに及ぶ約12万年間の堆積物のボーリング調査が実施され、花粉化石の出現傾向の変化から９つの花粉帯に区分されており、東北地方のウルム氷期以降の植生変遷の基準に位置付けられている（守田・日比野1994）。この内大きな気候変化に伴って花粉化石の出方が変化したと考えられるのは５花粉帯で、堆積層からはＡＴ火山灰（約25,000年前）や、鳴子－柳沢火山灰（約45,000年前）、能代火山灰（約80,000年前）が検出されており、相互対比の指標となっている。

ＡＴ火山灰

川樋盆地のＴＳ－Ⅰ帯に当たる約120,000年前より古い時期には、マツ属、ツガ属、シラカバ属の花粉が多く見られ、温帯性針葉樹林が広がっていたと考えられる。

120,000年前頃のＴＳ－Ⅱａ帯になると、ブナ、コナラ、ミズナラ、アカシデ、イヌシデ等の冷温帯性落葉樹林が広がっており、前時代よりも冷涼となるが現在の気候に近かったと考えられる。約110,000年前頃のＴＳ－Ⅱｂ帯になると冷温帯性落葉広葉樹は急速に少なくなり、温帯性針葉であるスギが優勢となる。スギの分布に大きな影響を与えるのは降水量と見込まれることから、季節による降水の偏りが想定される。



第3図　上ノ山館跡周辺の遺跡

表１　上ノ山館跡周辺の遺跡

	遺跡名	市町村	時代	種別
1	上ノ山館跡	上山市	戦国	要塞
2	中山城跡	上山市	戦国	城跡
3	月岡城跡	上山市	天文４年	館
4	松山遺跡	上山市	平安	集落跡
5	高楯城跡	上山市	南北朝期	館
6	長清水遺跡	上山市	縄文	集落跡
7	葉山窯跡	上山市	平安	古窯跡
8	思い川遺跡	上山市	縄文・平安	集落跡
9	上ノ代２遺跡	上山市	縄文	散布地
10	上ノ代１遺跡	上山市	縄文（早期末）	集落跡
11	源御寺遺跡	上山市	縄文（後期）	集落跡
12	陣山祇跡	上山市	戦国	城館跡
13	郷谷館遺跡	上山市	戦国	館
14	松沢遺跡	上山市	縄文	集落跡
15	物見山祇跡	上山市	戦国	城塁
16	天守閣遺跡	上山市	縄文	集落跡
17	諏訪原Ｂ遺跡	南陽市	縄文（後期）	散布地
18	諏訪原Ｃ遺跡	南陽市	縄文（前・中期）	集落跡
19	諏訪原Ａ遺跡	南陽市	縄文（後期）	集落跡
20	元中山日影遺跡	南陽市	縄文（中期）	散布地
21	岩部山遺跡	南陽市		館
22	岩谷堂祇跡	南陽市	縄文	集落跡
23	小岩沢遺跡	南陽市	縄文（前・中期）	集落跡
24	日向遺跡	南陽市	縄文（中期）	散布地
25	長治郎遺跡	南陽市	縄文（後期）	散布地
26	一ノ倉遺跡	南陽市	縄文	散布地
27	大洞山遺跡	南陽市		館
28	青井流遺跡	南陽市	縄文	

約90,000年前頃のＴＳ－Ⅲ帯になると、スギが減少しマツ属、ツガ属、トウヒ属の針葉樹林が目立つようになり、冷涼化の兆候が認められる。

80,000年前頃に始まるＴＳ－Ⅳａ帯になると、スギがほぼ消滅し、針葉樹のマツ属、ツガ属、トウヒ属、モミ属と落葉樹のシラカバ属等の亜寒帯性針葉樹林で占められるようになり、ウルム氷期の中でも主氷期の初期の寒冷期に相当する。65,000年前頃のＴＳ－Ⅳｂ帯になると、コナラ属、ニレ属－ケヤキ属、ブナ属等の冷温帯性落葉樹が僅かであるが見られるようになり、前時代よりもやや温暖・湿潤になったと考えられる。30,000～10,000年前頃のＴＳ－Ⅳｃ帯になると、再び冷温帯性落葉広葉樹が見られなくなり、シラカバ属のほか、マツ属、ツガ属、トウヒ属、モミ属の亜寒帯性針葉樹が多くなり、終わり頃にはカラマツ属が現れる。ウルム氷期でも最も寒冷な時期に相当し、気温が現在よりも７～８℃低かったと想定されている。

ＴＳ－Ⅴ帯は深さ130～０ｍまで、約10,000年前～現在までの期間で、深さ130～60cm、約10,000～2,500年前のＴＳ－Ⅴａ帯と、深さ60～０cm、2,500年前から現在までのＴＳ－Ⅴｂ帯に二分される。ＴＳ－Ⅴａ帯では針葉樹が殆ど見られなくなり、ハンノキ属、コナラ属、ブナ属、クマシデ属等の落葉樹が多く見られ、ＴＳ－Ⅴｂ帯では、これ等にマツ属とスギ属が加わる。

川樋盆地の花粉分析

以上川樋盆地の花粉分析の成果から、120,000年前以降現在まで、⑴温帯性針葉樹林時代→⑵冷温帯性落葉広葉樹林時代→⑶スギを主とする温帯性針葉樹林時代→⑷温帯性針葉樹と亜寒帯性針葉樹の混交林時代→⑸亜寒帯性針葉樹林時代→⑹亜寒帯性針葉樹と冷温帯性落葉広葉樹の混交林時代→⑺亜寒帯性針葉樹林時代→⑻冷温帯性落葉広葉樹林時代の順序で変遷してきたことが指摘されている（守田・日比野1994）。

Ｂ　周辺の遺跡

上ノ山館跡（第３図１）が位置する中山地区は、山形方面と米沢方面とを結ぶ要衝の地に当たり、嘗ては東置賜郡中川村に含まれていたが、1955年の赤湯町との合併を経て、1957年に大字中山が分町して上山市に合併された。同地区は置賜と村山の郡境となっており、江戸時代には米沢街道の宿駅で、人馬継立の問屋や旅籠屋が並んでおり、藩境の境目番所として上ノ山館

跡の直下に中山御番所が設置されていた。

米沢街道

米沢街道（最上街道ともいう）は、米沢を起点として糠野目・大橋・赤湯・川樋・小岩沢・中山と北へ伸び、掛入石がある領境から最上領に入り、川口宿を通り、上山宿手前の三本松の追分で羽州街道に接続する脇街道で、米沢から最上領への最も近距離の道として重要であった。米沢から赤湯までは、米沢盆地の中央部を通る平坦な街道であるが、赤湯・川樋間の鳥上坂は難所であり、川樋からは前川に沿った１条の道のみで、小岩沢・元中山そして中山までは約七里（約28km）の道程で、中山付近の五十町（約5.5km）は馬も叶わぬ険路であったという。

中山城跡

上ノ山館跡に南接する中山城跡（第３図２）は、標高343.9mの天守山の山頂に築かれた戦国期の山城で、家中屋敷を挟んで山城の部分と、標高282.5mの独立丘陵である前森山の部分から成り立っている。天守山は西側に桧沢（ひのきさわ）、東側に横川、北側には深い谷が切り込んでおり、三方を天然の渓谷に囲まれている。中核には本曲輪・二の曲輪・三の曲輪が良好な状態で残されている。主郭である本曲輪は、南北51m、東西38mで楕円形を呈しており、その周囲に土塁が築かれている。ほぼ東北隅に当たる部分に正方形からなる石積みからなる物見台（天守台）が設けられている。二の曲輪は本曲輪より4.9m低い位置に造作され、縦83m、横49mで、中山城内では最大規模の曲輪である。三の曲輪は二の曲輪よりも17.9m低い位置に構築され、東西53m、南北40mで、長方形に近い形状を持つ。北側には本曲輪と同様に土塁が築かれており、その高さは２～2.5m、幅は２～８mを測る。

前森山

前森山は南北175m、東西72mの楕円形を呈した独立丘陵で、平地との比高差は約20mを測る。山頂部北側を平坦にしたのが主曲輪で、南北130m、東西13m、その南東側には長さ120m、幅10mの細長い帯曲輪が平行して構築されており、更にその周囲に狭い帯曲輪が幾重にも巡らされている。山城を防備するための施設であったと考えられるが、中山城構築以前の楯と見なす見解も提出されている（伊藤ほか2003）。なお家中屋敷の部分は上杉領になってからの配置跡で、2005～06年山形県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施されている。

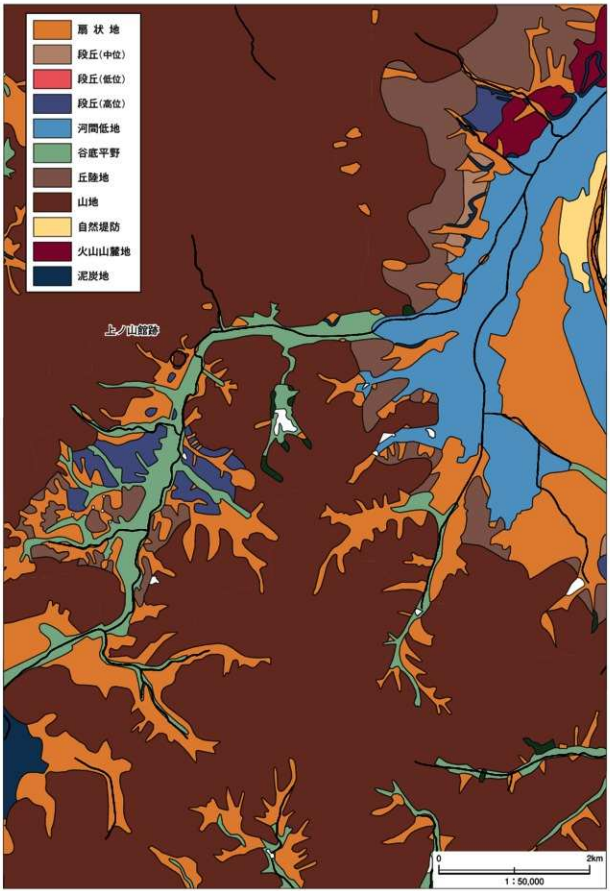
物見山楯跡

上ノ山館跡の東方に位置する物見山楯跡（第３図15）は、標高359.8mの奥羽山系の小起伏山地に、永禄・元亀年間（1558～1572年）頃中山城主であった中山弥太郎によって最上領を三方に見渡す自然の要害の地に、物見台と烽火台の性格をもって構築されたものと言われている。山頂はほぼ平坦な三角形の地で、南北22.5m、東西12.5mの曲輪を設け、東側の下段に帯曲輪が巡らされている。帯曲輪が最上領に面した東側のみに設けられていることから、中山城を防備するのと、中山城から岩部山楯（第３図21）に連絡し、置賜一円を防備するため、境目の物見楯として重視されていたと考えられる。このように中山城と上ノ山館・物見山楯は三位一体の関係にあり、米沢街道沿いに南下してくる最上勢を断固立ちはだかる境目の城になっていたと想定される。

高楯城

中山城と米沢街道上において対峙した最上方の城館が、高楯城（第３図５）である。高楯城は白鷹山系の東麓に突出した標高356.3mの虚空蔵山に構築された山城で、山頂から上山盆地を一望できる要害の地に主郭を築いている。主郭は東西56m、南北36mの瓢箪形に整形した平坦面であり、物見台的な役割をなしていたと考えられる。その下段には曲輪を幾重にも配し、空堀も構築されており、かなり堅固な山城であった。

中山地区は中世において、「北条荘」に含まれる地域であった。しかし「中山」が文献に名



第4図　上ノ山館跡周辺地形分類図

を現すのは16世紀以降であり、それ以前の確かな史料は見出せない。元中山の天台宗成就院が鎌倉時代の建長年間（1249～56年）の開山、中山の浄土宗西福寺が一向俊聖によって弘安３年（1280年）に開かれたと伝えられていることから、鎌倉時代には中山盆地内に集落が成立していたと考えられる。

中山城が重要な役割を果たす城として登場するのは16世紀半ば過ぎで、伊達氏と最上氏がそれぞれ領地拡大の動きを見せた時期に相当し、伊達輝宗・政宗と最上義光が領主となり、奥羽の戦国時代が激動する時期からである。天正16年（1588年）伊達政宗が大崎（現宮城県）に攻撃を仕掛けた時、大崎の援護にまわった最上義光はこれを牽制し、政宗と対立した。この時に中山が抗争の中心舞台となった。この抗争は同年の３月に始まり、７月に和睦が成立し終息したが、その後伊達政宗は中山の支配管理の任務を小国蔵人盛俊に与え、領界警護を強化した。しかし天正19年（1591年）政宗は岩出山に転封となり、会津には蒲生氏郷が転封され、米沢には蒲生郷安、中山には同じく郷可が入り、中山は蒲生領となった。

天正16年（1588年）

蒲生領

蒲生氏は置賜領内に米沢城・中山城・小国城の三城を置いたが、中山城は置賜北部の政治・軍事の重要拠点に位置付けられた。蒲生氏は近畿を主な活躍の場としてきたが、中山城はこれまで例を見ない石垣を伴う山城であることから、蒲生領の時代に新たな手法で築城されたと考えられる。蒲生氏郷は文禄４年（1595年）に死去し、その跡を秀行が継いだが、慶長３年（1598年）１月に宇都宮に移封となり、代わって上杉景勝が越後から入部した。蒲生時代は二代８年であったが、この期間は領主相互の争いはなく、平穏の内に経過した時代であった。

上杉景勝

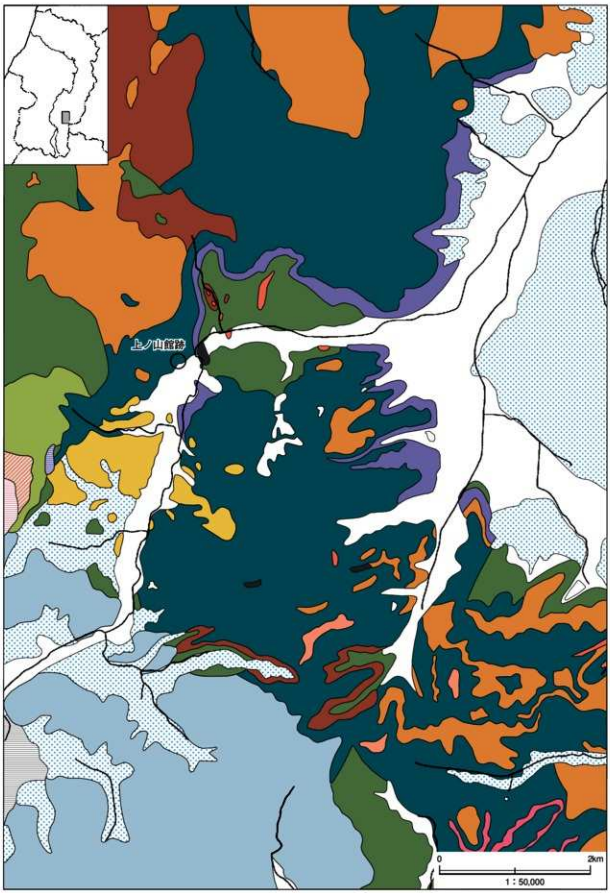
会津120万石に移封となった上杉景勝は、直ちに領内の支配体制の強化に努めたが、蒲生時代には三つの城だったのが、上杉支配下になると七城となった。米沢城・高畑城・金山城・中山城・荒砥城・鮎貝城・小国城で、この内最上に対する軍事交通の要所にあるのが、金山城（吉野川沿い小滝峠筋の起点）、中山城（上杉領最北端で最上領上山城と対峙）、荒砥城（最上川右岸・白鷹丘陵を越える山道の起点）、鮎貝城（最上川左岸・五百川西街道の起点）の四城であった。中山城には、横田式部少輔旨俊が城主として領界の警護にあたった。

慶長５年（1600年）

中山城に係わる最大の戦いは、慶長５年（1600年）秋の「関ヶ原合戦」に連動した最上と上杉の戦いである。同年５月徳川家康は上杉討伐を声明し、６月には諸大名に対し会津攻めの分担を定めた。上杉側はこれに備えて警備を更に厳重にしたと推測され、中山城もこの時点で一段と防衛力を固めたと見られる。同年７～８月にかけて上杉討伐に動き出した徳川家康に呼応して、東北地方では秋田実季、戸沢政盛、南部利直等が最上領に集結した。伊達政宗も徳川方として７月24日に白石城を攻め落とした。ところが近畿地方で石田三成方の軍勢が大津・伏見を攻撃し、徳川方の防衛軍が敗れると、家康は７月25日に上杉攻めの中止を決定し、小山から江戸に戻ってしまう。伊達政宗もこの段階で上杉攻撃を中止し、山形に集結した東北の諸大名も自分の領地に帰ってしまう。こうして徳川主力軍による南方からの上杉攻撃計画は潰れ、北方からの奥羽諸大名連合軍による攻撃もなくなり、８月時点で上杉に対抗しようとしたのは最上のみとなった。

長谷堂城の攻防戦

同年９月３日上杉方では米沢で軍議を開いて最上攻撃を決定し、総大将は米沢城主直江山城守兼続で、山形を西、南、北の三方から攻略することを計画した。主力軍は荒砥城に集結し、畑谷城を攻め落とし、その勢いをもって長谷堂城に進攻した。長谷堂城の攻防戦はなかなか決



第5図　上ノ山館跡周辺表層地質図

砂および泥
泥炭
礫、砂および泥
礫岩、砂岩・礫岩およびシルト岩の互層、含亜炭
黒色頁岩
礫岩、アルコーズ砂岩および砂質凝灰岩
上部：火山礫凝灰岩・細粒凝灰岩および凝灰質泥岩の互層
下部：酸性火山礫凝灰岩および凝灰角礫岩
酸性軽石凝灰岩、泥岩および凝灰質泥岩
流紋岩質岩石
玄武岩質岩石
安山岩質岩石
石英安山岩質岩石
変質安山岩
石英安山岩質岩石
含紫蘇輝石普通輝石石英安山岩
含礫安山岩質火山礫凝灰岩・凝灰質粒砂岩および安山岩質火山礫凝灰岩
変質安山岩質凝灰岩類
花崗岩質岩石
花崗岩質岩石

第6図　表層地質図凡例

着がつかず、その間伊達政宗からの援軍もあって、戦いは膠着した。こうして９月末に関ヶ原合戦の結果が到着し、上杉軍が撤退し、最上軍の追撃となり、10月１日に長谷堂方面の戦いは終結した。

高楯城攻略

中山城は上杉領北端の拠点で、上杉勢はここから最上領の高楯城攻略に出動した。９月16日に直江兼続からの指令を受けて、中山城に大軍が集結し、翌17日4,000の上杉軍が出陣した。上山攻撃軍の先陣は大将木村造酒丞親盛（長井郡代・与板衆・上杉景勝の旗本）で、中山城から現在の前川ダムの山間を経て赤坂に向かったが、赤坂上の台に到着した時、待ち受けていた最上軍と乱戦となり、大将木村は戦死を遂げた。後陣の大将は横田式部旨俊住庵（中山城主）と清水三河守康徳（信州出身の武将・中山に土着居住）で、掛入石から川口に出て火を付け、石曽根・高松・長清水と進出し、諸方の村を焼き払った。しかし上山勢の抵抗は凄まじく、清水三河守は20騎の部下に守られ退却、川口と掛入石の間まで引いた所でまた上山勢に襲われ、部下が防戦している間に中山城に逃げ入った。横田旨俊は高松まで進んでいたが、後ろを取り巻かれ苦戦に陥り、ようやく切り抜けて川口と中山の境「栃屋」まで退いた所で、また上山勢に襲われ、部下が防戦している間に、山伝いに中山城に帰り着いた。勝ちに乗じた最上勢は中山城を取り囲み、鉄砲を放って攻め立てたが、城際まで攻めることができず、夜になると引き返してしまったという。この日以降の中山城を巡る情勢は判然としないが、上杉軍は城に籠もり、最上軍は自領を警備するだけで、中山城攻撃には出なかったと考えられる。

横田式部旨俊住庵

以上のように、関ヶ原での戦いは慶長５年（1600年）９月15日に結末が明らかとなり、中山の戦いは９月17日にほぼ落着し、長谷堂では10月１日に上杉軍の撤退と激烈な追撃戦で終わった。出羽全体ではその後も小競り合いが続いたが、次第に軍事行動は終息に向かって行き、翌慶長６年（1601年）春には酒田に残存する上杉軍が最上義光の軍門に下って、８ヶ月に及んだ出羽合戦はようやく終局を迎えた。

慶長６年（1601年）

酒田城（亀ヶ崎城）の攻防戦と時を同じくして、中山・川口の境界付近では再び最上対上杉の局地的戦闘があった。慶長６年（1601年）３月24日、領境の見張り番の足軽と最上領の足軽が争いを始めた。上杉方は川口まで押し出して、双方鉄砲の撃ち合いとなった。当初中山城主横田旨俊は家臣を派遣して早急に引き取らせようとしたが、最上方は次第に大勢となり、上山城主の子息里見権兵衛も出陣し、これを見て横田旨俊も鉄砲隊を引き連れて出撃し、上山勢を追い散らしたという。しかし本格的な戦いまでは発展しなかった。中山は領境だけに、その後も土地や山林の権益を巡って、小さな争いは避けられなかった。中山城はそれを抑えるためにも、大きな役割を果たしたと考えられる。

上杉景勝は慶長６年（1601年）８月、関ヶ原合戦で西軍に加担した廉で、米沢30万石に減封されて米沢藩が成立した。それ以降幕藩体制が安定すると、中山城は戦略的・軍事的意味を薄めて、領内北部の行政・警察の役割を担うことになった。米沢藩成立時には、会津時代と変わりなく領内に重臣を分封し城代に任じ、領内を支配すると共に、外敵を防衛していた。置賜郡には高畑城・掛入石中山城・荒砥城・小国城の五支城があり、掛入石中山城は慶長３年（1598）以来横田旨俊が寛永８年（1631年）まで城代を務めていた。元和元年（1615年）一国一城令により殆どの城が破却されることになるが、城構えはそのままだったらしく、城代以下諸士の駐屯は変わらず藩境の警備に当たっていた。元禄５年（1692年）２月、米沢藩財政の窮乏なども

あり支城体制を改め、「中山城」は「中山御役屋」と改称され、「城代」も「役屋将」と呼ばれるようになった。中山御役屋には、上級武士の御役屋将１名、中級武士で副将格の「御附馬上」２名がおり、その下で実務に携わる扶持方・手明・足軽などの下級武士40名程がいたとされている。旧中山小学校の校舎跡地に御役屋が設置されていたという。

中山御役屋

中山御番所は藩境に設けられた番所で、上ノ山館跡直下の現在の渡辺氏宅の場所に設けられていた。既に慶長３年（1598年）に上杉領となる中山に関所を設け、領境の警備と通行人を監視していたが、同６年（1601年）に見張り番の足軽と最上領の足軽の小競り合いがあったことは前記した。関所には厳重な門構えがあり、その左右に柵が張られており、昼間は番所役人が一人、夜は足軽が番をしたといわれている。

中山御番所

3　調査の経緯と概要

A　調査区の配置（第１・７図）

上ノ山館跡は白鷹山系片倉山の山麓が北から南に突き出た半島状の丘陵の全域が遺跡の範囲となる。今回発掘調査の対象になったのは、その内の南東部分に相当する（第１図）。面積では10,000㎡が調査対象となったが、この区域は地すべりの頻発地帯であり、調査区中央東側には地割れが認められ、地すべりの危険が予見された。そこで関係機関と協議した結果、この区域は発掘調査の対象から除外し、現況の地形を測量することで対応することで了承が得られた。また調査区の中央西側には嘗て階段状の帯曲輪が存していたと言われるが、1970年頃に果樹園（ブドウ園）造成のため地表面が掘削されていた。そこでこの区域も、調査対象から除外することにした。

今回の発掘調査の対象となったのは、中央部の未調査区域を挟んだ北側と南側に当たる。北側は「北調査区」、南側は「南調査区」と呼称した。

「北調査区」は、道路の北東側に相当する。調査面積は4,800㎡で、幅の狭い帯曲輪が幾重にも巡らされており、米沢街道を見下ろすには好適な場所となっている。調査区の中央部分は地すべりの痕跡と思われるU字形の抉りとなっており、段々の畑に整地されているが、流出した土砂は山裾に張り出すように観察される。調査区の現況は殆どが杉林であったが、調査区南西の平坦部は嘗て黄金神社があった場所で、今回の工事に先行して丘陵頂部に移設され、発掘調査を経ないまま丘陵頂部は削平されてしまった。調査区は中央の地すべり部分を挟んで「北調査区北曲輪」と「北調査区南曲輪」に区分され、嘗て黄金神社があった平坦部は「北調査区最上段」と呼称した。

北調査区

「南調査区」は、道路の南端に相当する。調査面積は3,000㎡で、丘陵の末端で中山城跡を臨む場所に当たり、東流する横川で中山城跡と画される。幅の狭い帯曲輪が幾重にも巡らされるが、地すべりが随所に見られ、崩れた土を整形して段々の畑にした部分もあり、原形を留めていないとの教示を旧地権者から得た。また用地買収後も畑地として使用されていたため、収穫を待って地形測量を実施した。土層観察と遺構確認のためのトレンチの開設も検討したが、これまで何度も地すべりが起きており、地元住民の不安を煽りかねない点と、表土を除去することで土砂流出や鉄砲水を誘発する可能性も予見されたことから、現況の測量のみに留め、本

南調査区

調査区の調査を終了した。

B　グリッドの設定（第８図）

世界測地系

上ノ山館跡の座標は、事業対象区域だけではなく、将来史跡整備が予定されている中山城も網羅する必要があった。そこで公共座標（世界測地系）に基づく大グリッド制を採用することにした（第８図）。

大グリッド

小グリッド

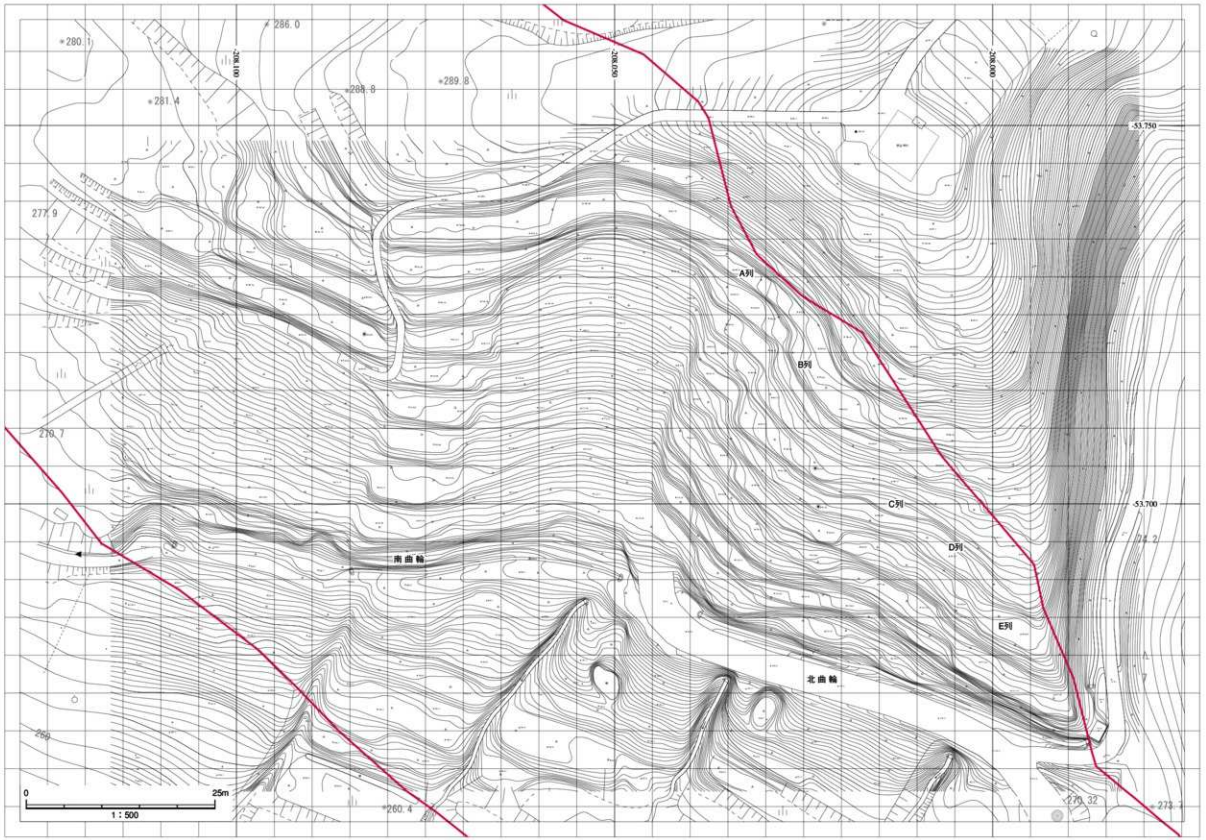
上ノ山館跡と中山城の全域が網羅できるように公共座標（世界測地系）を基準として、50m×50mの方眼の大グリッドを設定した。中山城跡の主郭を西端として西から東に向かってアルファベット、上ノ山館跡の北側を北端として北から南に向かってアラビア数字を付与し、大グリッドをアルファベット・数字の順で「Ｈ２」と表記した。更に大グリッド内を５ｍ方眼の小グリッドに分割し、西から東に00・01・02…の一の位、北から南へ00・10・20…の十の位とした。従って各々の小グリッドは、大グリッド名を頭に冠して「Ｈ２－22」と表記した。50m四方の大グリッドは、５ｍ四方の小グリッド100個で構成されることになる。

上ノ山館跡の大グリッドは、北調査区がＧ３・Ｈ２・Ｈ３・Ｉ２、南調査区がＦ４・Ｆ５・Ｇ４・Ｇ５・Ｈ４・Ｈ５に相当する。南北方向（Ｙ座標）のＦ列の座標値が－54.000、Ｇ列が－53.900、Ｈ列が－53.800、Ｉ列が－53.700、東西方向（Ｘ座標）の２列の座標値が－208.000、３列が－208.100、４列が－208.200、５列が－208.300となる。

C　調査の経過

今回の調査は、現地調査を2005年５月17日（火）から同年11月４日（金）までの実働114日間で実施した。発掘調査は、調査区設定の後に表土除去に着手するのが通例であるが、本遺跡では調査区域に伐採した木材が多量に残されていたため、その除去作業から着手する必要に迫られた。先ず北調査区について重機による木材搬出作業を委託し、調査区域から木材等の上物を除去した。その後調査区内に残された細かな木材や草刈り等の清掃作業を行い、現況の地形測量を実施し、それから表土除去に着手した。調査工程は以下の通りである。

５月17日
器材の搬入、現地事務所設営、発掘調査開始
５月18日～27日
北調査区内清掃作業
５月30日～６月９日
北調査区内清掃作業、伐木処理（重機使用）
６月10日
北調査区航空写真撮影実施（委託業務）
６月13日～７月29日
北調査区表土除去（重機使用）、遺構検出
７月22日～７月29日
北調査区基準点測量実施（委託業務）
８月１日～９月２日



第7図　上ノ山館跡現況図

第8図　グリッド配置図

北調査区遺構検出、北調査区内清掃作業、実測作業
９月５日～９月22日
北調査区最上段遺構検出、実測作業、南調査区内清掃作業
９月26日～10月27日
南調査区清掃作業、実測作業
10月11・12日
南調査区基準点測量実施（委託業務）
10月28日
関係者対象の現地説明会を実施
10月31～11月２日
現地撤収に向けての諸作業
11月４日
器材撤収、発掘調査終了

Ⅱ　北調査区の成果

1　北調査区の概要（第９・10・12図）

北調査区は、遺跡の北東側に相当し、今回の調査を主体をなす調査区である。上山市大字中山字上ノ山に位置する。

本調査区の発掘調査は、2005年５月18日～９月21日までの実働84日間で実施した。調査区には伐採された木材が多量に放置されたままであったため、その除去作業から着手した。始めに重機を用いて調査区内から木材を搬出したが、重機で除去しきれなかった細かな木材が多量にあり、また作業の安全確保と調査の作業工程から調査範囲外の木材の搬出も余儀なくされたため、５月18日～６月９日まで人力による清掃作業と併行して、重機による木材搬出作業を実施した。上記の作業が完了した６月10日に航空撮影と地形測量を実施し、その後６月13日～７月29日まで重機による表土除去作業と遺構検出に努めた。調査区の現況は、幅の狭い階段状の帯曲輪が幾重にも巡らされていたのと、随所に木の切株が存していたため、大型重機を導入することができず、小型重機を用いての作業を強いられた。そのため表土除去に多くの日数を要する結果となった。

北調査区　北調査区は、国道13号線や奥羽本線を見下ろせる眺望がひらけた場所に当たり、米沢街道を南下する最上勢を防備するには好適の場所となっている。調査区の標高は270～295ｍの範囲にあり、高低差は25ｍを測る。調査面積は4,800㎡を測るが、中央部分はＵ字形に抉られており、地すべりの痕跡であったと想定される。調査時前はスギが植林されていたが、嘗てはブドウ園であったともいう。その直下の山裾の人家近くには、扇形に張り出すように土砂が堆積しており、流出した土砂であったと考えられる。この地すべりの痕跡を挟んで調査区を二分し、北側を北曲輪、南側を南曲輪と呼称した。また南曲輪の上方にある黄金神社の平坦地は、北調査区最上段とした。調査区内の現況はスギの植林地であった。

曲輪下端に当たる調査区の東端には、水路が掘り込まれている。白鷹山系からの沢水をこの水路に流し込み、人家に導水して、住民の生活水として利用されていたが、現在は簡易水道のパイプが敷設されており、通常は水路に流水を見ない。しかし雨天時には溢水した水が流れ込んでおり、調査時には止水しないよう注意を要した。

南曲輪　南曲輪は10段の帯曲輪から構成される。帯曲輪の横幅は10～15ｍ、縦幅は2.5～４ｍの範囲にあり、上位２段は調査区中央の地すべり部分の直上に認められる。従って南曲輪が地すべり区域にも伸びて、北曲輪と連結していた可能性も考えられる。南端は生活道路が開削されており、帯曲輪は断ち切られている。本来は北調査区最上段（旧黄金神社）の南東下方に認められる帯曲輪に、連結していた可能性が考えられる。南曲輪では２段目に土坑１基（１号土坑）が検出されたが、土塁・柱穴等の曲輪に伴うと思われる遺構は検出されなかった。

北曲輪　北曲輪については、曲輪の配列状況から便宜的に南からＡ～Ｅ列の５列に区分した。南側のＡ・Ｂ列の帯曲輪は明確に観察されたが、北側のＣ～Ｅ列は階段状の曲輪が明確でなく、緩斜

面を呈した部分や狭小な平坦部も存した。A列は８段、B列は10段、C列は９段、D列は８段、E列は３段の帯曲輪が認められた。北曲輪では、B列２段とC列３段の間に石組遺構１基（１号石組跡）が検出されたが、土塁や柱穴等は検出されなかった。なおA列の上方の調査区域外にも、縦幅１m程度の帯曲輪が７～８段観察された。

北調査区最上段

北調査区最上段は標高290mを測り、嘗て黄金神社があった場所である。平坦地であることから、主郭であったと想定されたため、３本のトレンチを設定し、遺構の検出に努めたが、土坑・柱穴等は認められなかった。この主郭部分は、南北15m、東西13mとほぼ円形で、周囲に高さ40cm、幅1.2mの土塁が配されていたと記されている（伊藤ほか2003）。しかし黄金神社移設に際して削平されたのか、土塁の存在は確認できなかった。

2　南曲輪について（第９・12・15・16図）

10段の帯曲輪

南曲輪は北調査区の南側に位置しており、10段の帯曲輪から構成される。１段目は地すべり部分直上のＨ２区に存し、２段目がその直下から南側に長く続き、北曲輪と南曲輪を連結するように存しており、３段目以下が南調査区に限定される。３段以下の曲輪は、北端が地すべり部分、南端が生活道路、東端は水路で画されている。現況はスギの植林地であった。

１段目は、縦幅２m、横幅12m程度で、標高は290mを測る（第16図）。グリッドはＨ２－81・90・91に相当し、この北側には調査区域外となるが、北曲輪Ａ列上段の幅狭の帯曲輪（縦幅１m前後）が７～８段構築され、丘陵頂部（現在の黄金神社）に至っている。

２段目は、縦幅３m、横幅42m程度で、標高は286.5～287mを測る。グリッドはＨ２－72・82・91・92、Ｈ３－01・11・12・22・32・42・52に相当する。南調査区では最上段となり、北端は北曲輪Ａ列２段と接する。南曲輪ベルト南側では１号土坑（後述）が検出された。２段目の西側は生活道路で、広い平坦面が作出されており、南端は生活道路で断ち切られているが、更に南側に曲輪が連続すると思われる（第９図）。同段からは、近代の石筆が採集されている（第23図６）。

３段目は、縦幅３m、横幅15m程度で、標高は284.5mを測り、グリッドはＨ３－33・43・53に相当する。南端は生活道路で断ち切られているが、更に南側に曲輪が連続すると思われる（第９図）。同段からは縄文時代の剥片（第21図２・３）と近代の磁器（第24図９）が採集されている。

４段目は、縦幅３m、横幅12m程度で、標高は283mを測り、グリッドはＨ３－34・44・54に相当する。南端は生活道路で断ち切られているが、更に南側に曲輪が連続すると思われる（第９図）。同段からは近代の磁器（第24図４）が採集されている。

５段目は、縦幅３m、横幅11m程度で、標高は281.5mを測り、グリッドはＨ３－35・45・55に相当する。南端は生活道路で断ち切られているが、更に南側に曲輪が連続すると思われる（第９図）。同段からは近代の磁器（第24図１）が採集されている。

６段目は、縦幅2.5m、横幅11m程度で、標高は280mを測り、グリッドはＨ３－36・46・56に相当する。上段と同様に南端は生活道路で断ち切られているが、更に南側に曲輪が連続すると思われる（第９図）。

７段目は、縦幅2.5m、横幅10m程度で、標高は278.5mを測り、グリッドはＨ３－47・57に

相当する。この段以下では、南側の曲輪とのつながりが不明瞭となる。

8段目は、縦幅2.5m、横幅11m程度で、標高は276.5mを測り、グリッドはH３－48・58・68に相当する。

9段目は、縦幅４m、横幅12m程度で、標高は275mを測り、グリッドはH３－49・59・69に相当する。

10段目は最終段となる。縦幅2.5m、横幅12m程度で、標高は273mを測り、グリッドはＩ３－40・50・60に相当する。下段の水路の標高は269mであり、比高差は４mを測る。

3　北曲輪について（第９・12・17・18図）

北曲輪は北調査区の北側に位置し、南東方向に舌状に張り出した地形に対して帯曲輪が５列構築されている。南から北へA～E列としたが、南側のA列とB列の状況は良好であったが、北側のC～E列は平坦面が明確でない箇所も多々認められた。D列とE列の間には丘陵への上り下りに使用したと思われる幅１m程度の削平痕（生活道路）が存していた。またB列２段目とC列３段目の間には１号石組跡が認められたが、崖線を登るための石段として構築されたと見なされる。調査区の北西端のラインは丘陵の尾根筋に相当し、生活道路となっているが、その北西側は急峻な斜面をなしており、南端は地すべり部分、東端は水路で画されている。A～C列が南東方向にU字形に張り出した部分、D・E列は緩く抉れた部分に相当する。調査ではB列とD列にベルトを設定し、土層を観察した（第17・18図）

A　列

8段の帯曲輪

A列は８段の帯曲輪が、南東方向に向かって構築されている。最上段の２段はB列の２段と連結し、鉤状をなしており、それ以下の北端はB列よりも低く構築されている。またA列の上位の調査区域外には、幅狭の帯曲輪は７～８段が構築されており、これ等を合わせると16段程度の帯曲輪が連続していたことになる。

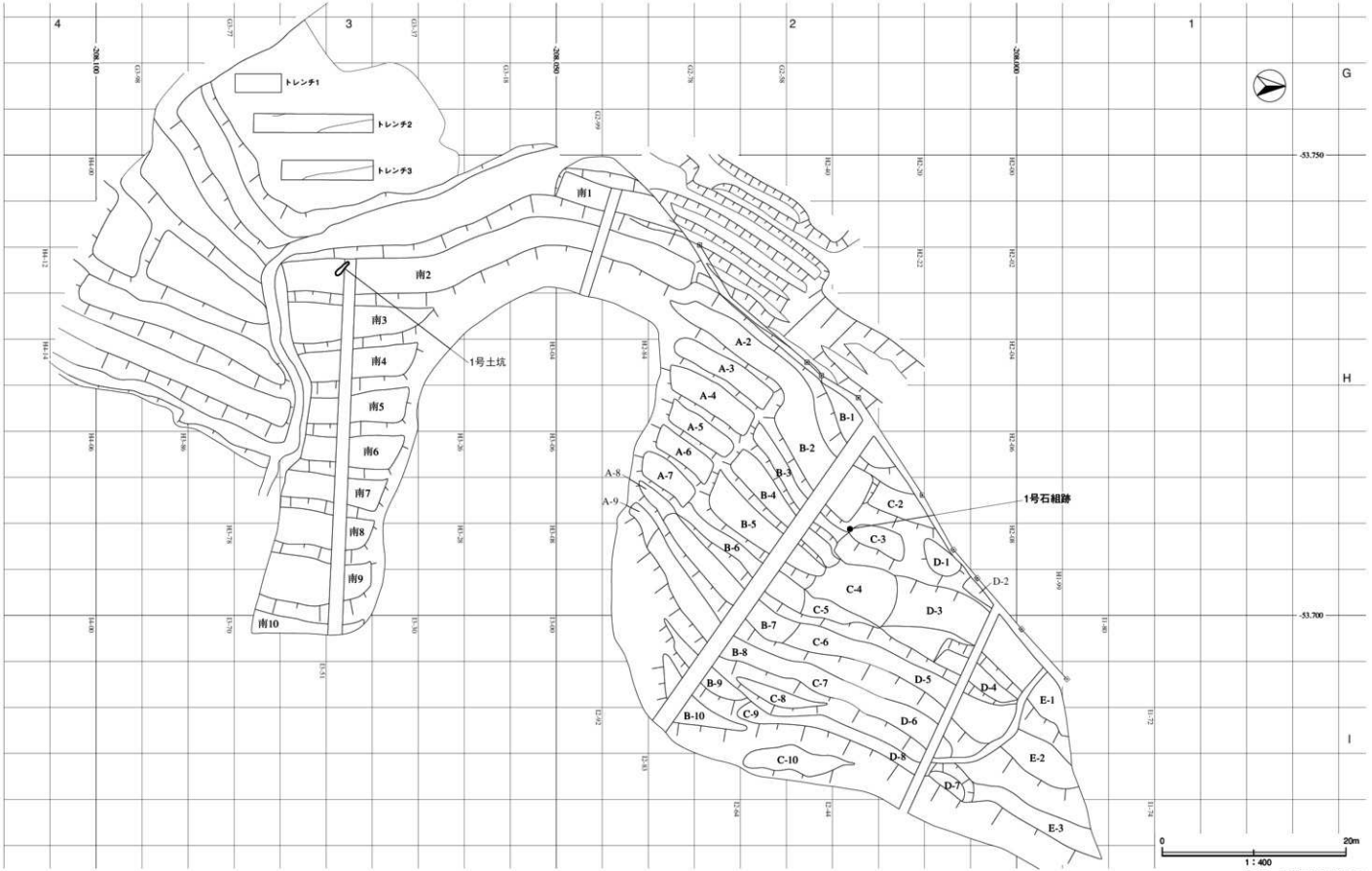
２段目は、A列の最上段に当たり、縦幅２m、横幅15m程度で、標高は286mを測る。グリッドはH２－44・54・63に相当する。北端はB列２段と連結しており、鉤状に屈折した部分が境界となる。B列との呼称を合わせるため２段から付与し、１段を欠番とした。南端は南曲輪２段と崖線で接しており、A列２段の方が1.5m低い。またA列２段の上方は調査区域外となるが、幅狭の曲輪が７～８段構築されており、その最高所が現在の黄金神社である。黄金神社の標高は295mを測り、同段と丘陵頂点との比高差は９mとなる。なお同段南端の直下からは、古代の須恵器片（第26図５）が採集されている。

３段目は、縦幅２m、横幅12m程度で、標高は284.5mを測る。北端はB列２段と接するが、A列２段の方が1.5m程度低くなる。グリッドはH２－54・55・64に相当する。

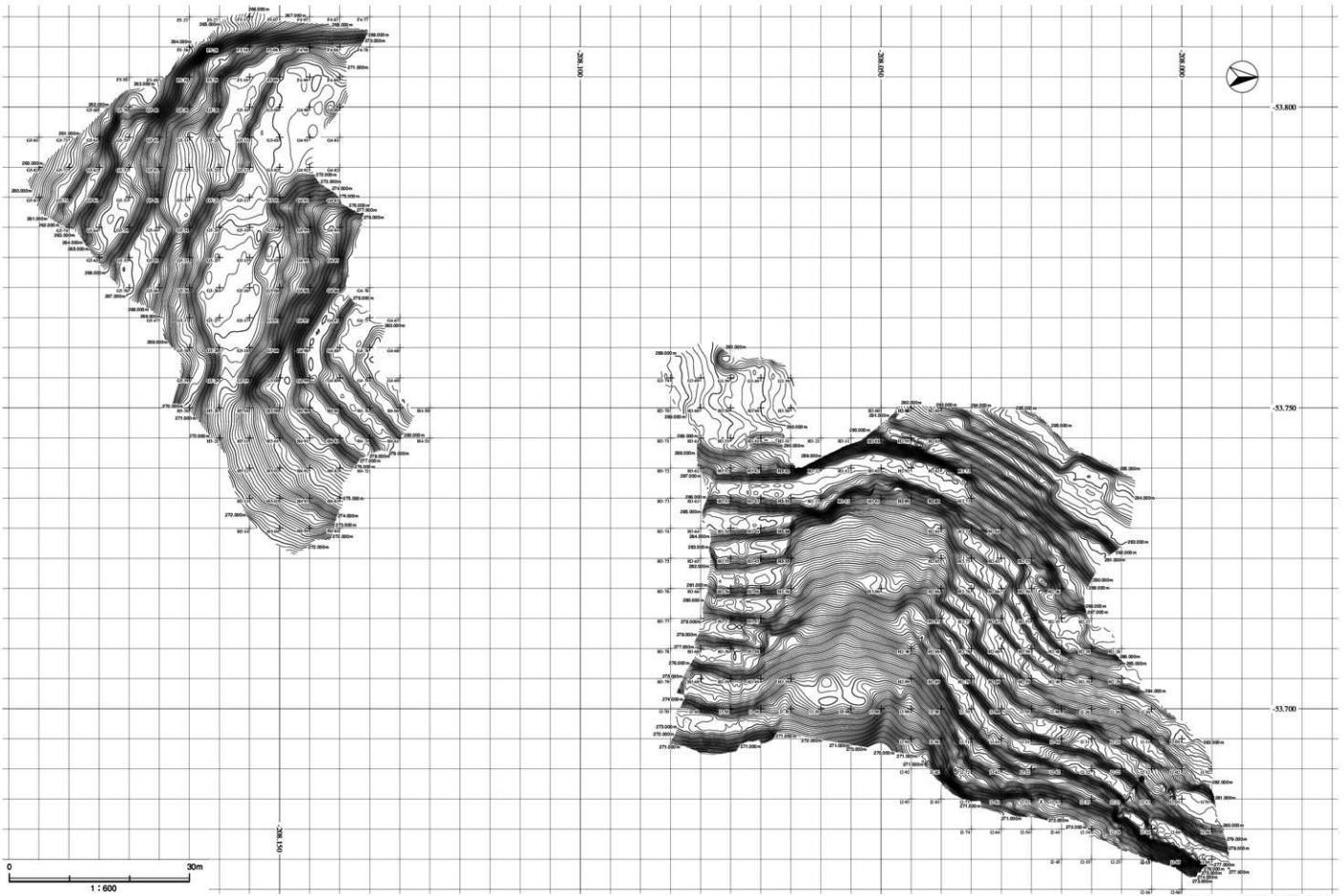
４段目は、縦幅2.5m、横幅９m程度で、標高は283.5mを測る。北端はB列３段に接するが、A列４段の方が１m程度低くなる。グリッドはH２－65・75に相当する。

５段目は、縦幅２m、横幅８m程度で、標高は282.5mを測る。北端はB列４段に接するが、A列４段の方が１m程度低くなる。グリッドはH２－66・75・76に相当する。同段からは縄文時代の剥片（第21図７）が採集されている。

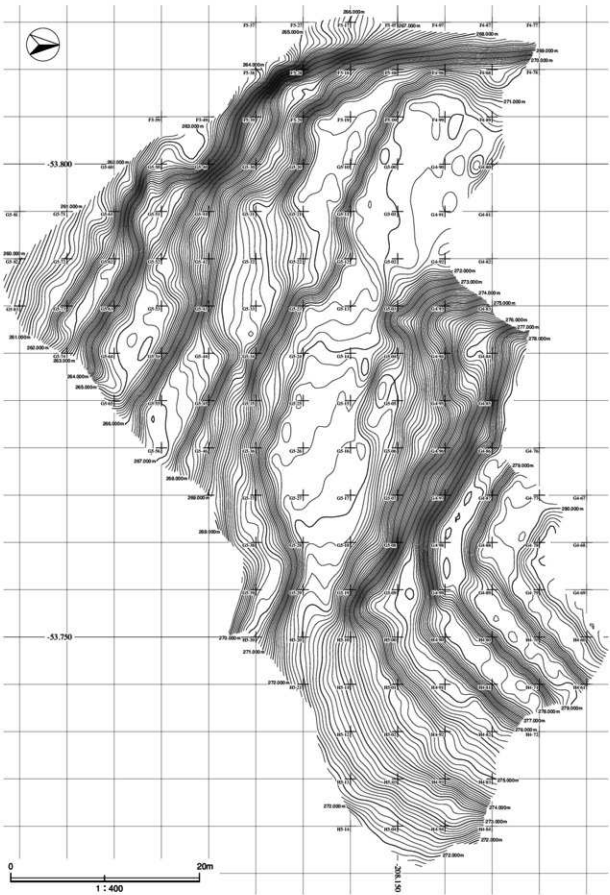
６段目は、縦幅２m、横幅８m程度で、標高は281.5mを測る。北端はB列５段に接するが、



第9図　北調査区縄張り図



第10図　上ノ山館跡調査区測量図



第11図　上ノ山館跡　南調査区

A列6段の方が、0.5m程度低くなる。グリッドはH２－66・67・76に相当する。

7段目は、縦幅２m、横幅６m程度で、標高は280.5mを測る。北端はB列6段と接するが、A列7段の方が、0.5m程度低くなる。グリッドはH２－76・77に相当する。

8段目は、縦幅1.5m、横幅５m程度で、標高は279.5mを測る。北端はB列7段と接するが、A列8段の方が僅かに低いのみで、その境界は明確でない。グリッドはH２－77・78に相当する。7段と8段の境界の崖線から「寛永通宝」(第23図９）が採集された。

寛永通宝

9段目は、縦幅1.5m、横幅４m程度で、標高は278mを測る。北端はB列8段と連結し、その境界は明確でない。グリッドはH２－78・87に相当する。なお表土除去前この下位にも、２段の狭小な曲輪が認められた（第７図)。しかし構築面には締まりが認められず、削平または流出した土砂を階段状に成形したものと思われる。

B　列（第17図）

10段の帯曲輪

B列は10段の帯曲輪が南東方向に向かって構築され、舌状張り出しの中央部分に相当する。北曲輪の中でも最も残存状況が良好で、１段の面と10段の面の比高差は14.5m程度となる。北側のC列との境界は判然としないが、南側のA列とは段差で画される。B列の上位の調査区域外には、縦幅３～４m程度とやや幅広の帯曲輪が２段構築されており、これ等を合わせると12段程度の帯曲輪が連続していたことになる。

1段目は、縦幅３m、横幅12m程度で、標高は288.5mを測る。弧状に張り出しており、北端は丘陵北西の崖線となるが、南端はA列直上の幅狭の帯曲輪に連結する。但しB列１段の方が僅かに低い。グリッドはH２－35・36に相当する。

2段目は、縦幅５m、横幅14m程度で、標高は286mを測る。B列の中では最も規模の大きな曲輪で、北端はC列２段と同３段に接し、南端はA列２段と連結する。B列２段はC列２段よりも1.5m低く、C列３段よりも１m高くなっており、B列２段とC列３段の間には、石段として１号石組跡（第14図）が構築されている。グリッドはH２－37・45～47に相当する。同段からは水晶（第23図４）が採集された。

１号石組跡
水晶

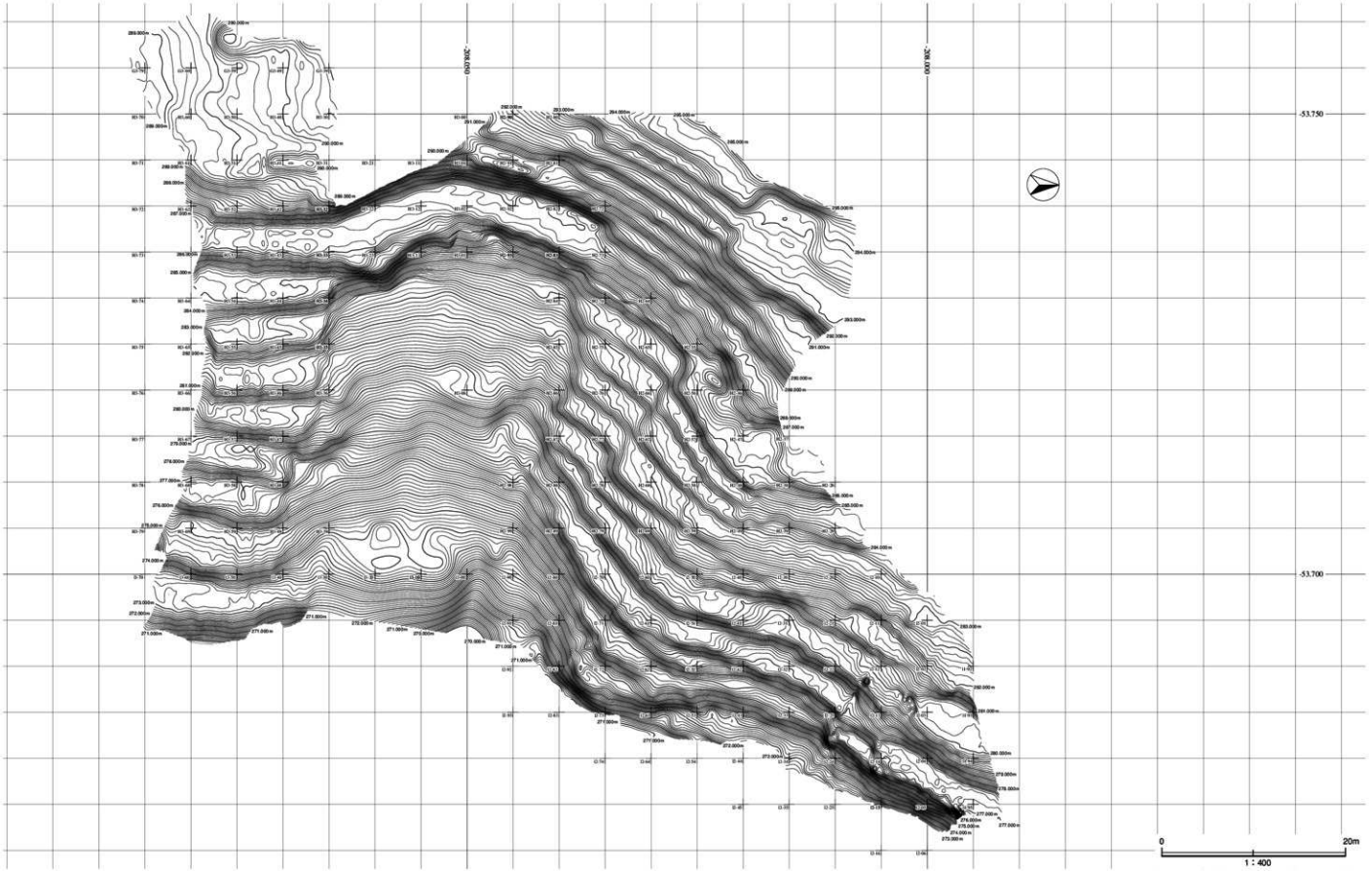
3段目は、縦幅1.5m、横幅15m程度で、標高は284.5mを測る。北端はC列３段と同４段の間の崖線に接しており、南端はA列４段に接するが、B列３段の方が１m程度高くなる。グリッドはH２－47・56に相当する。

4段目は、縦幅２m、横幅15m程度で、標高は283.5mを測る。北端はC列４段の上部に接しており、南端はA列５段に接するが、B列４段の方が１m程度高くなる。グリッドはH２－48・56・57に相当する。

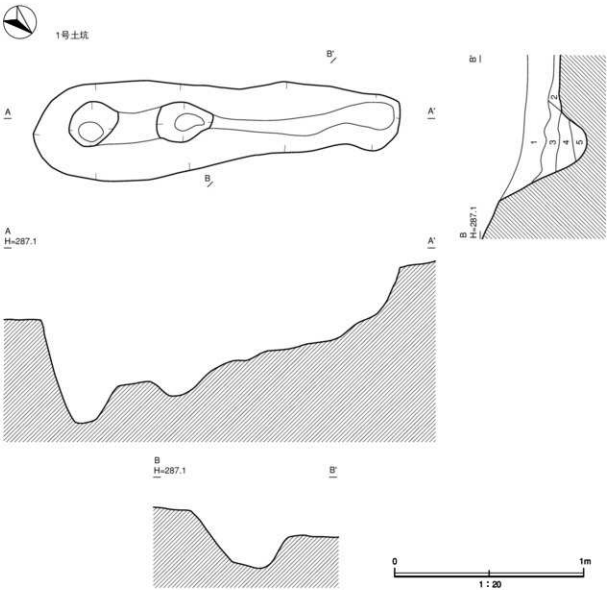
5段目は、縦幅３m、横幅15m程度で、標高は282.5mを測る。北端はC列５段の下部に接しており、南端はA列６段に接するが、B列５段の方が１m程度高くなる。グリッドはH２－48・57・58・67に相当する。

6段目は、縦幅1.5m、横幅14m程度で、標高は281mを測る。北端はC列６段と接しており、南端はA列７段に接するが、B列５段の方が0.5m程度高くなる。グリッドはH２－58・59・68に相当する。

7段目は、縦幅２m、横幅15m程度で、標高は279.5mを測る。北端はC列６段と接するが境界は不明瞭で、南端もA列８段と接するが、B列７段の方が僅かに高いので、境界は不明瞭



第12図　上ノ山館跡　北調査区



1号土坑

1. 黒褐色土（7.5YR3/2）　表土。ややしまりを欠く。粘質土、2mm大の小礫をやや多く含む。根の混入が著しい。
2. にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多く含む。
3. 灰褐色土（7.5YR4/2）　ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多く含む。
4. 黒褐色土（7.5YR3/2）　しまりを有す。粘質土、3よりも色調が暗く粘性を有す。2mm～5mm大の炭化粒をわずかに含む。
5. 黒褐色土（7.5YR3/2）　しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫をやや多く含む。5mm大の粘土ブロックをやや多く含む。

第13図　1号土坑

である。グリッドはＨ２－59・68・69・78、Ｉ２－50に相当する。

８段目は、縦幅2.5m、横幅17m程度で、標高は278mを測る。北端はＣ列７段と連結し、南端はＡ列９段と連結している。グリッドはＨ２－69・78・79、Ｉ２－60・70に相当する。同段以下の南側は崖線となっており、北側のみ９・10段が連続するが、表土除去前は９・10段の面がＡ列まで続いていた。しかし構築面には締まりが認められず、削平または流出した土砂を階段状に成形したものと思われる。

９段目は、縦幅が２m、横幅10m程度で、標高は276mを測り、三日月状の張り出しとなる。北端はＣ列９段に接するが、Ｂ列９段の方が0.5m程度高くなる。グリッドはＩ２－61・70・71に相当する。

10段目は、縦幅３m、横幅10m程度で、標高は274mを測り、三日月状の張り出しとなる。グリッドはＩ２－62・71・72に相当する。以下は崖線となって水路に至るが、その比高差は3.5mを測る。

Ｃ　列

９段の帯曲輪

Ｃ列は南東に向かって張り出した丘陵の北側に相当する。Ｂ列１段の北東直下から始まって９段の帯曲輪で構成されいるが、Ｂ列１段を１段目と捉えたため、Ｃ列は２段からの呼称を付与した。上位の北西側は丘陵の稜線となり、その西方は急峻な崖線である。北側のＤ列との境界は不明瞭で、南側のＢ列とは上位においては崖線で画されるが、中央付近はＢ列と連結する。Ｃ列２段の面と同10段の面の比高差は14.5mを測る。

２段目は、Ｃ列の最上段に当たり、縦幅２m程度で、標高は287.5mを測る。北端は調査区域外で急峻な崖線となり、南端はＡ列１段と２段に接する。Ａ列の１段と２段の高さの中間に相当し前者より１m低く、後者より1.5m高くなっている。グリッドはＨ２－27に相当する。

３段目は、縦幅２m、横幅６m程度の狭小な帯曲輪で、標高は285mを測る。北端はＤ列１段に接し、南端はＢ列２段に接する。Ｃ列３段とＢ列２段の比高差は１mを測り、その間には

１号石組跡

１号石組跡（第14図）が構築されている。グリッドはＨ２－28・38に相当する。

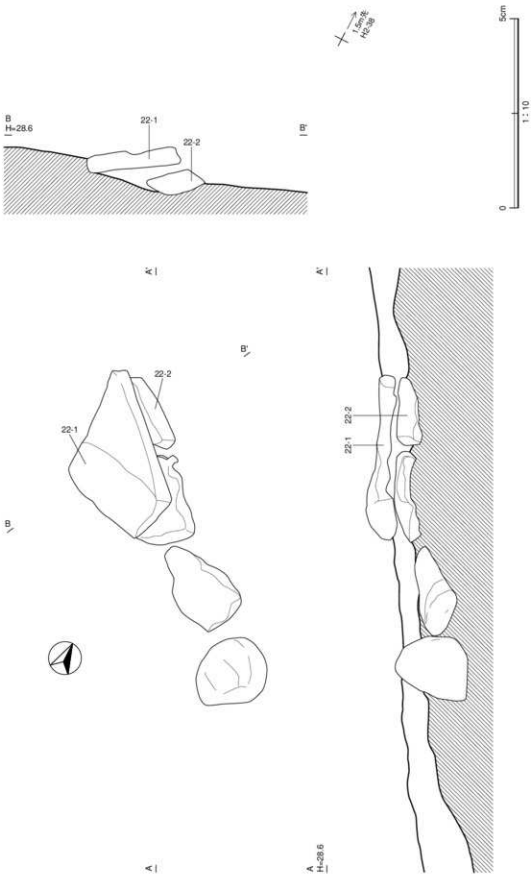
４段目は、緩斜面で平坦面は作出されていない。上下の傾斜よりも緩くなっており、土砂の流出または後年の削平が想定される。標高は283～284mの範囲で、北端はＤ列３段、南端はＢ列４段と同５段に接する。グリッドはＨ２－39に相当する。

５段目は、縦幅２m、横幅８m程度で、標高は281.5mを測る。北端はＤ列４段に接し、南端はＢ列６段と連結する。グリッドはＨ２－49、Ｉ２－30・40に相当する。

６段目は、縦幅2.5m、横幅12m程度で、標高は280mを測る。北端はＤ列５段、南端はＢ列７段に連結するが、両者よりもＣ列６段が0.5m程度高くなる。グリッドはＩ２－30・40に相当する。

７段目は、縦幅２m、横幅11m程度で、標高は278.5mを測る。北端はＤ列６段、南端はＢ列８段に連結するが、両者よりもＣ列７段が0.5m程度高くなる。グリッドはＩ２－41・51に相当する。同段からは近代の磁器（第26図２・４）が採集されている。

８段目は、縦幅1.5m、横幅10m程度で、標高は277mを測り、三日月状の形状を呈する。面としてはＢ列８段と同９段との間に構築されており、狭小な帯曲輪となっている。グリッドはＩ２－41・51に相当する。同段からは縄文時代の剥片（第21図４）が採集されている。



第14図　1号石組跡

9段目は、縦幅1.5m、横幅10m程度で、標高は275.5mを測る。北端はD列8段に連結し、南端はB列9段に接するが、C列9段の方が0.5m程度低くなる。グリッドはⅠ2－42・52に相当する。

10段目は本列の最下段に当たり、ややD列寄りに構築されている。縦幅2m、横幅11m程度で、標高は273mを測る。紡錘形の形状を呈し、下端の水路との比高差は2m程度となる。グリッドはⅠ2－43・53に相当する。以下は崖線となって水路に至るが、その比高差は2mを測る。

D　列（第18図）

8段の帯曲輪

D列は、北西方向に弱く抉れた丘陵に、南東方向に面するように8段の帯曲輪で構成されている。しかし一列に配列される訳ではなく、部分的にしか見られない段も存しており、第18図のベルトは全ての段を網羅していない。D列1段の北西側は丘陵の稜線となっており、その西方は急峻な崖線である。北側のE列とは、生活道路である幅50cm程度の削平痕によって画され、南側のC列との境界は不明瞭である。D列1段の面と同8段の面との比高差は11mを測る。

1段目は、縦幅3m、横幅5m程度で、標高は286.5mを測る。北東側にD列2段、南西側にC列2段が接するが、同段は前者より1.5m高く、後者より1m低くなっている。グリッドはH2－18・19に相当する。

2段目は、D列1段の北東に位置し、縦幅1.5m、横幅5m程度で、標高は285mを測る。北西側は丘陵の稜線で、その西方は急峻な崖線となっており、南西側にD列1段が接する。グリッドはH2－09に相当する。

3段目は、D列1段と同2段の下方に位置する緩斜面で、明確な平担面は存しない（第18図）。標高は282.5～283.5mの範囲にあり、北側下方のみにD列4段が存し、南側下方はD列5段となる。北端は生活道路を挟んでE列1段と接し、南端はC列4段との境界が不明瞭である。グリッドはH2－19、I2－00・10に相当する。同段からは粘板岩製の石板の破片（第23図1）

十銭白銅貨

や「十銭白銅貨」（第23図10）が採集されている。

4段目は、D列3段の北東にのみ見られ、縦幅2m、横幅10m程度で、標高は281.5mを測る。北端は生活道路を介してE列1段と同2段の崖線に接し、南端はD列3段の緩斜面と接している。グリッドはⅠ1－01・11に相当する。

5段目は、縦幅2m、横幅16m程度で、標高は280mを測る。北端は生活道路を介してE列2段に接し、南端はC列6段に連結している。グリッドはⅠ2－11・21に相当する。

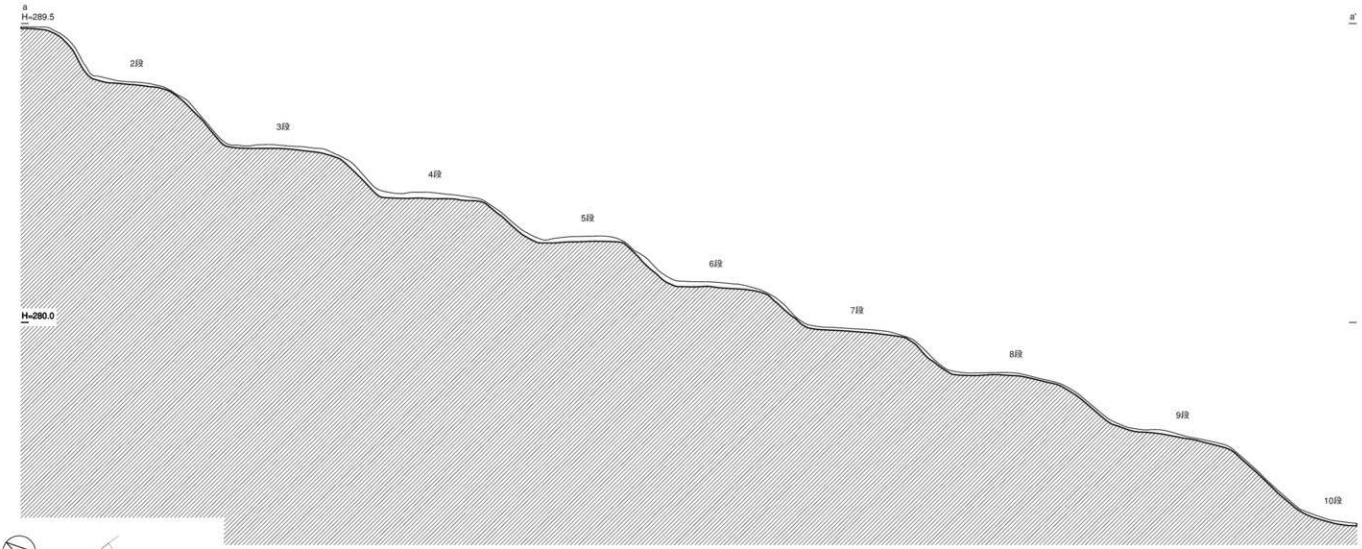
6段目は、縦幅2m、横幅12m程度で、標高は277.5mを測る。北端は生活道路を介してE列2段と同3段の間の崖線に接し、南端はC列7段に接するが、D列6段の方が1m低くなっている。グリッドはⅠ2－12・22に相当する。同段からは近世の磁器（第26図3）

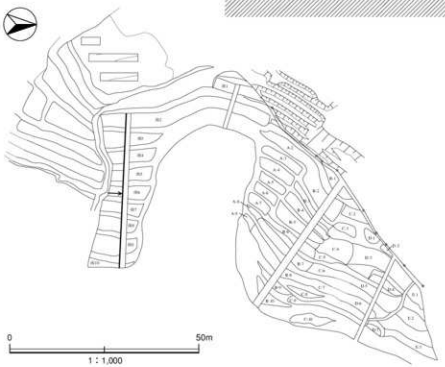
近世の磁器

が採集されている。

7段目は、縦幅1.5m、横幅5m程度の狭小な帯曲輪で、標高は276mを測る。D列6段と同8段の北端に部分的に存しており、北端はE列3段と接するが、D列7段の方が1m低くなっている。グリッドはⅠ2－13に相当する。

8段目は本列の最下段に当たり、縦幅1.5m、横幅10m程度で、標高は275.5mを測る。北端はD列7段に接し、南端はC列9段に連結するが、D列7段よりも同8段の方が0.5m程度低





南曲輪

1段	ナシ		
2段	表土	黒褐色土（7.5YR3/2）	ややしまりを欠く。粘質土、2mm大の小礫をやや多く含む。根の混入が著しい。
	地山	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多く含む。
3段	表土	黒褐色土（7.5YR3/2）	しまりを欠く。粘質土、2mm大の小礫をやや多く含む。根の混入が著しい。
	地山	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多く含む。
4段	表土（上面）	黒褐色土（7.5YR3/1）	しまりを欠く。粘質土、層厚5cm程度。2mm大の小礫をやや多く含む。根の混入が著しい。
	（下面）	暗褐色土（10YR3/3）	ややしまりを有す。2mm～5mm大の小礫を多く含み、5mm～1cm大の粘土ブロックを少々含む。
	地山	褐色土（10YR4/3）	ややしまりを有す。2mm～5mm大の小礫を多く含む。
5段	表土（上面）	黒褐色土（10YR3/2）	しまりを欠く。粘質土層厚5cm程度、2mm大の小礫をやや多く含む。根の混入が著しい。
	（下面）	暗褐色土（10YR3/3）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫をやや多く含む。
	地山	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	しまりを有す。粘質土、5mm～1cm大の小礫を多く、2mm大の炭化粒を少々含む。
6段	表土（上面）	黒褐色土（10YR3/1）	しまりを欠く。粘質土、層厚5cm程度、2mm大の小礫をやや多く含む。根の混入が著しい。
	（下面）	暗褐色土（10YR3/3）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫をやや多く含む。
	地山	灰黄褐色土（10YR4/2）	しまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多く、2mm大の炭化粒を少々含む。
7段	表土（上面）	灰褐色土（7.5YR4/2）	ややしまりを欠く。層厚10cm程度。2mm大の小礫をやや多く含む。根の混入が著しい。
	（下面）	暗褐色土（10YR3/3）	ややしまりを欠く。2mm～5mm大の小礫を少々含む。
	地山	灰黄褐色土（10YR4/2）	しまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多く、5mm大の炭化粒を少々含む。
8段	7段と同じ。		
9段	表土（上面）	黒褐色土（7.5YR3/1）	しまりを欠く。層厚3cm程度。5mm～1cmの小礫を少々含む。根の混入が著しい。
	（下面）	黒褐色土（10YR3/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫をやや多く、2mm大の炭化粒を少々含む。
	地山	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫をやや多く、2mm大の炭化粒を少々含む。
10段	表土	黒褐色土（7.5YR3/2）	しまりを欠く。5mm大の小礫を少々含む。根の混入が著しい。
	地山	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多く含む。

第15図　北調査区南曲輪土層断面図

第16図　北調査区中央曲輪ベルト土層断面図

くなっている。グリッドはⅠ２－23・32に相当する。以下は崖線となって水路に至るが、その比高差は3.5mを測る。

E　列

E列は、北曲輪の北端に位置しており、北西側は丘陵の稜線となっており、その西方は急峻な崖線である。南東方向に面するように３段の帯曲輪で構成されており、それぞれの比高差は大きい。北端は丘陵の稜線で画され、南端が生活道路で画されD列と接する。E列１段の面と同３段の面との比高差は６mを測る。

３段の帯曲輪

１段目は緩斜面で、南端は生活道路を介してD列３段に接している。標高は283～283.5mを測り、グリッドはⅠ１－91・92が相当する。同段からは近代の石筆（第23図８）が採集されている。

２段目は、縦幅４m、横幅８m程度で、標高は280mを測る。南端は生活道路を介してD列５段に接する。グリッドはⅠ１－82・93に相当する。同段からは縄文時代の剥片（第23図３）や近代の磁器の仏飯器（第26図６）が採集されている。

仏　飯　器

３段目は、縦幅2.5m、横幅14m程度で、標高は277mを測る。南端はD列７段と接するが、E列３段の方が１m程度高くなっている。以下は崖線となって水路に至るが、その比高差は５mを測る。

4　北調査区最上段（第19図）

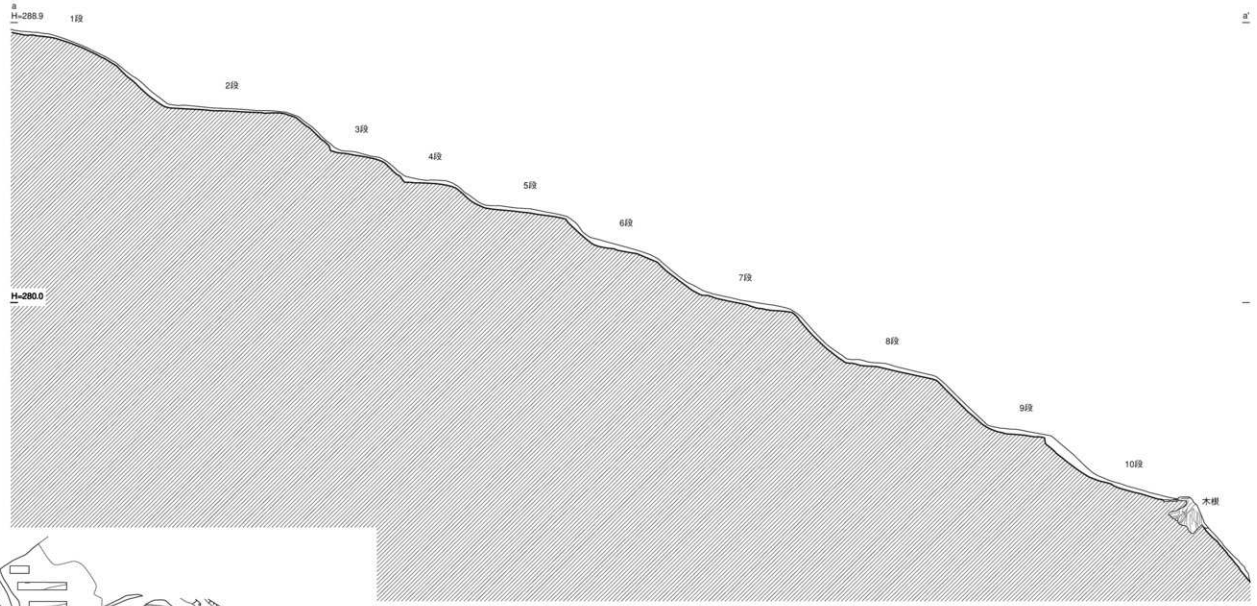
北調査区最上段は、北調査区の南西端に相当し、南曲輪の直上となる。調査範囲は20m×20mの四角形で、北西側は未買収地が残っており、事業者との協議で調査区域からは除外した。北西から南東方向に弱く傾斜した平坦地で、標高は289～290mを測り、嘗て黄金神社が存していた。主格であったと想定され、南北15m、東西13mとほぼ円形で、周囲に高さ40cm、幅1.2mの土塁が配されていたと記されている（伊藤ほか2003）。

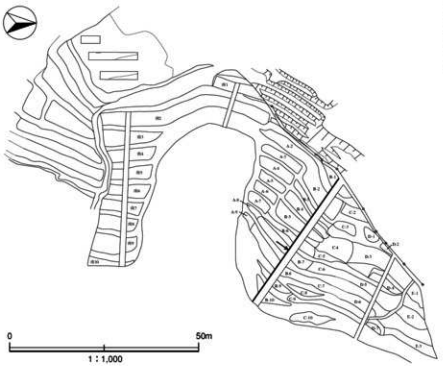
この平坦地については、座標軸に沿って３本のトレンチを開設し、遺構の検出に努めた。2004年の山形県教育委員会の試掘調査で３本のトレンチが設定されいたが、今回の調査でそのうち２本のトレンチの位置を確認することができた。しかし柱穴や土坑等の遺構を検出することはできず、また土塁の存在も確認できなかった。該域は北西を除く三方は崖線となっており、南東に張り出すように曲輪が囲繞されていたと考えられる。しかし南西側は果樹園造成のため掘削を受け、北東側は生活道路のため開削されており、遺存状況が良好なのは南東側のみで、その下位にある曲輪は南曲輪２～６段に連結すると見なされる。

平坦地のトレンチは、西側から「トレンチ１～３」と呼称した。東西が２m、南北が５～13mで、２～３mの間隔を置いて設定した。基本土層は表土が黒褐色土で、その下位に黒褐色～暗褐色土が堆積し、地山層はにぶい黄褐色土となる。表土から地山層までは10～20cmと薄い堆積で、北西から南東方向に傾斜している（第９図）。

遺物は、トレンチ２～同３の間で縄文時代の剥片（第21図５）や近代の磁器（第24図２・３・５、第26図１）、トレンチ３で縄文時代の石篦（第21図１）が出土した（第20図）。

石　　篦

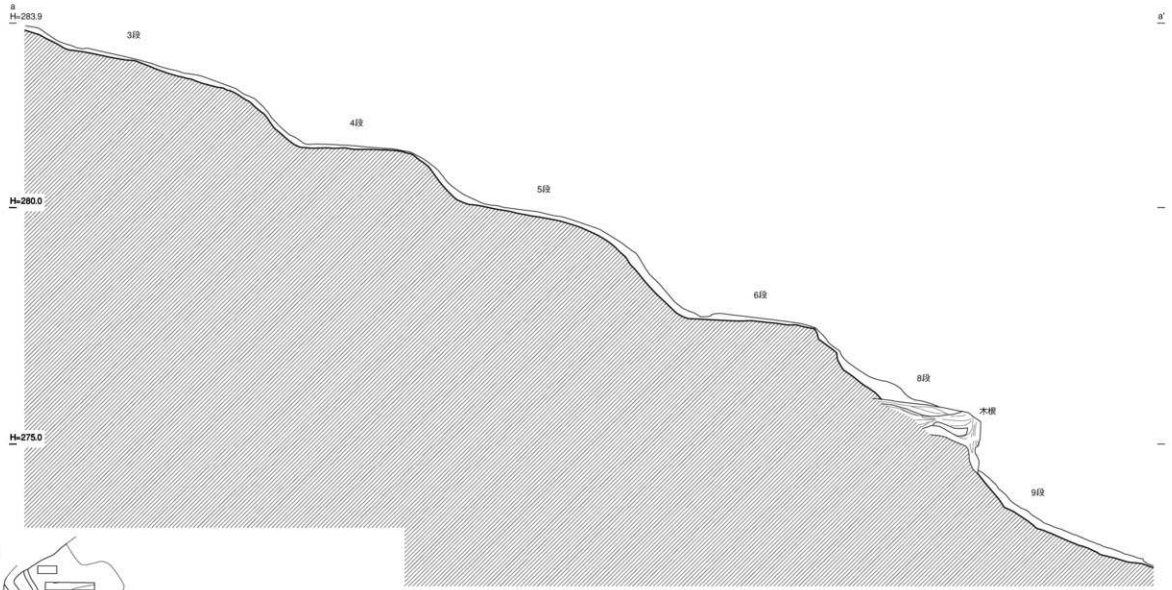


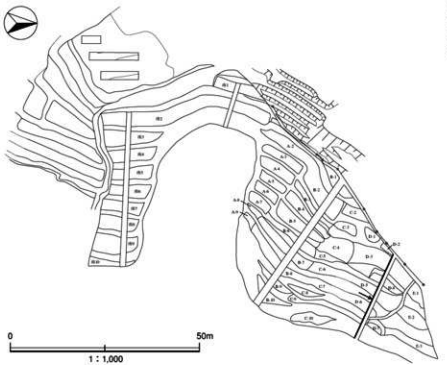


B列

1段	表土	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを欠く。粘質土、2mm～5mm大の小礫を少々含む。根の混入が著しい。
	地山	暗灰黄色土（2.5Y5/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多量に含む。
2段	表土	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を少々含む。根の混入が著しい。
	地山	暗灰黄色土（2.5Y5/2）	しまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多量に含む。
3段	表土	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを欠く。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含む。根の混入が著しい。
	地山	暗灰黄色土（2.5Y5/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多量に含む。
4段	表土	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含む。根の混入が著しい。
	地山	暗灰黄色土（2.5Y4/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多量に含む。 灰黄褐色土がまだら状に混じるが、根の進入の痕跡であろう（表土）。
5段	表土	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～3cm大の小礫を多く含む。根の混入が著しい。
	地山	暗灰黄色土（2.5Y5/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～3cm大の小礫を多量に含む。 灰褐色の粘土ブロックを、まだら状に含む。
6段	表土	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～3cm大の小礫を多量に含む。根の混入が著しい。
	地山	灰褐色土（10YR5/1）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～3cm大の小礫を多量に含む。5mm大の褐色粘土ブロックを多く含む。
7段	表土	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を少々含む。根の混入多。
	地山	黄灰色土（2.5Y6/1）	しまりを有す。2mm～3cm大の小礫を多量に含む。5mm大の酸化した礫のブロックが多く認められる。
8段	表土	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを有す。5mm～1cm大の小礫、同大の粘土ブロックを多く含む。根の混入多。
	地山	黄灰色土（2.5Y6/1）	ややしまりを有す。2mm～5cm大の礫を多量に含む。酸化して暗橙褐色をしたブロックも多く見られる。
9段	表土	灰褐色土（7.5YR4/2）	ややしまりを有す。粘質土、5mm～1cmの小礫を多量に、2mm大の粘土粒を少々含む。 根の混入が著しい。
	地山	暗褐色土（10YR3/4）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～2cm大の礫を多量に含む。
10段	表土	灰黄褐色土（10YR4/2）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多く含む。根の混入が著しい。
	地山	にぶい褐色土（7.5YR5/3）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～2cm大の礫を多量に含む。

第17図　北調査区北曲輪B列土層断面図

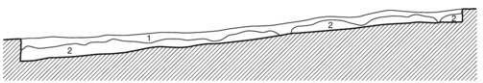




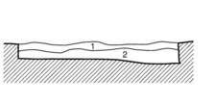
D列

1段	ナシ		
2段	表土	黄褐色土（2.5Y5/3）	しまりを有す。粘質土、5mm大の小礫を多く含む。
			上面は10YR4/2の粘質土で、しまりを欠き、根の混入が著しい。
	地山	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含む。
3段	表土	黄褐色土（2.5Y5/3）	しまりを有す。粘質土、5mm大の小礫を多く含む。
			上面は10YR4/2の粘質土で、しまりを欠き、根の混入が著しい。
	地山	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含む。
4段	表土	灰黄褐色土（10YR4/2）	しまりを有す。粘質土、5mm大の小礫を多く含む。
	地山	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含む。
5段	表土	灰黄褐色土（10YR4/2）	しまりを欠く。粘質土、2mm～1cm大の粘土ブロックを多く含む。
			根の混入が著しい。
	地山	にぶい黄褐色土（10YR5/3）	しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含む。
6段	表土	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含む。
			根の混入が著しい。
	地山	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多量に含む。
7段	ナシ		
8段	表土	黒褐色土（7.5YR3/2）	しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含む。
			根の混入が著しい。
	地山	灰黄褐色土（10YR4/2）	しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多量に含む。
9段	表土	黒褐色土（10YR3/2）	しまりを欠く。粘質土、5mm～2cm大の小礫を多量に含む。
			根の混入が著しい。
	地山	にぶい黄褐色土（10YR5/4）	ややしまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多量に含む。
			黄色が強い。

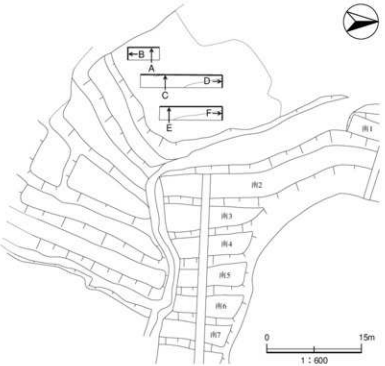
第18図　北調査区北曲輪D列土層断面図

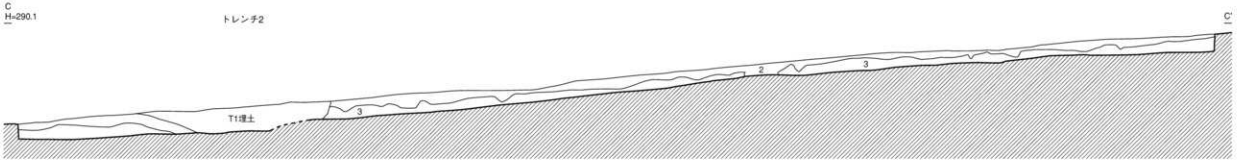


A-A'
地表　灰黄褐色土（10YR4/2）　やや しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の粘土粒を多く含む。5mm大の小礫を少々含む。根の混入が著しい。
2層　暗褐色土（10YR3/3）　やや しまりを有す。粘質土、5mm～1cm大の粘土ブロックをやや多く含む。5mm大の小礫を少々含む。5mm大の炭化粒を少々含む。
地山　にぶい赤褐色土（2.5Y4/3）　しまりを有す。粘質土、5mm大の小礫を少々含む。2mm～5mm大の風化礫（橙色）をやや多く含み、5mm大の炭化粒を少々含む。

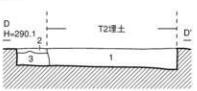


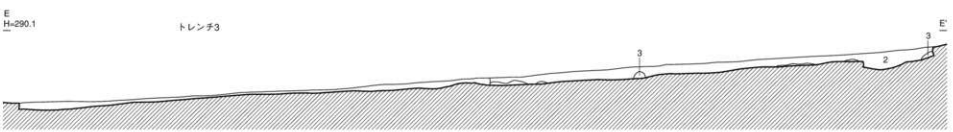
B-B'
地表　黒褐色土（10YR3/2）　しまりを欠く。粘質土、2mm～5mm大の小礫を少々含む。根の混入が著しい。
2層　黒褐色土（7.8YR3/2）　やや しまりを欠く　粘質土、2mm～5mm大の小礫を少々含む。5mm～1cm大の粘土ブロックをやや多く含む。5mm大の炭化粒を少々含む。根の混入が著しい。
地山　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含む。炭化粒は認められない。

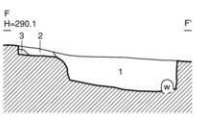




C-C'・D-D'
①灰褐色土（7.5YR4/2）　TT2埋土、しまりを欠く。5mm～5cm大の粘土。ブロックを多く含む。
②黒褐色土（10YR3/2）　しまりを欠く。粘質土表土。2mm～1cm大の小石礫を多く含む。根の混入が著しい。
③灰黄褐色土（10YR4/2）　しまりを有す。粘質土、2mm～5mm大の小礫を多く含み、5mm大の炭化粒を少々含む。根の混入が著しい。
地山　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　しまりを有す。粘質土、2mm～1cm大の小礫を多く含む。5mm大の炭化粒を少々含む。



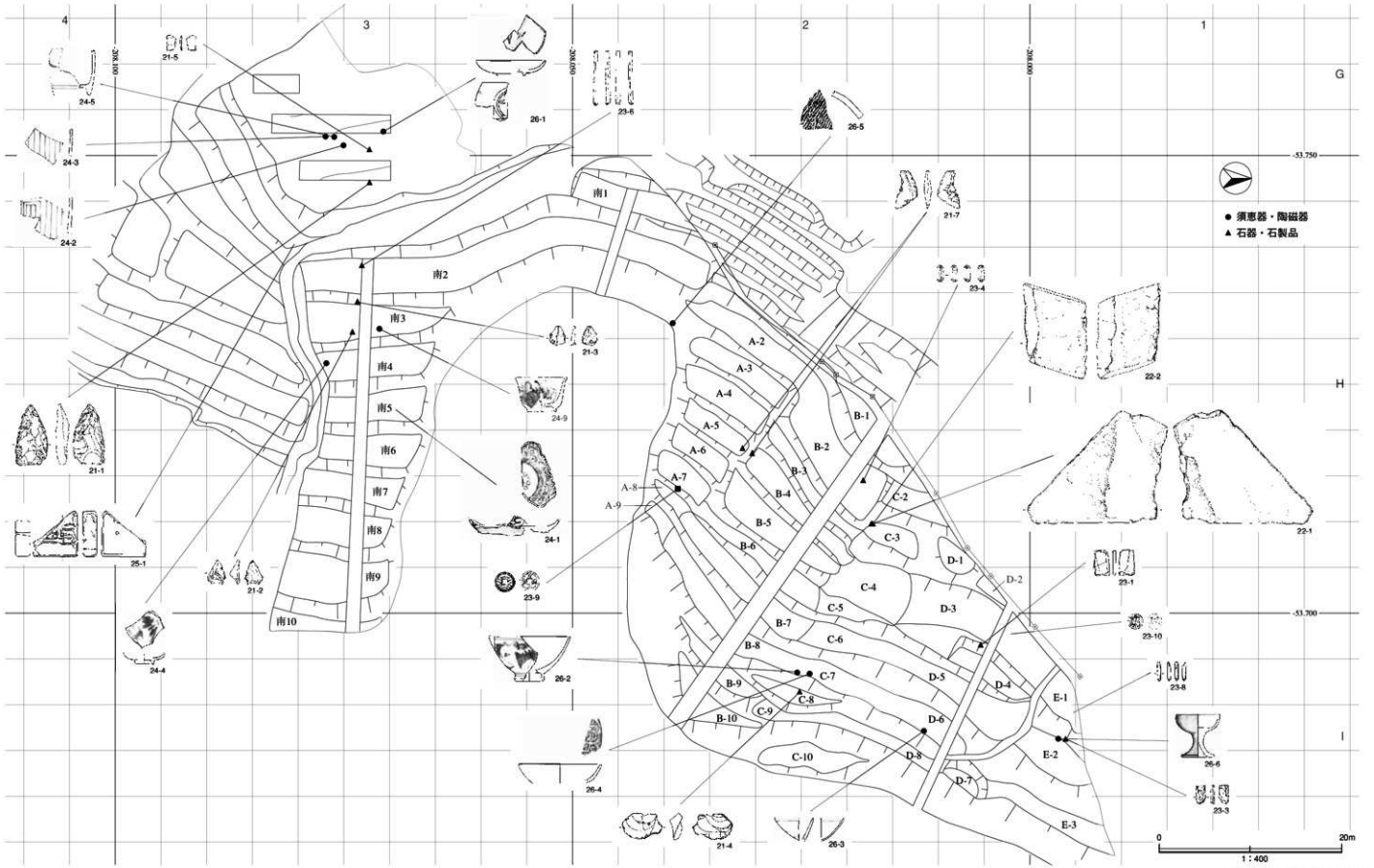




E-E'・F-F'
①灰黄褐色土（7.5YR4/2）～黒褐色土（7.5YR3/2）　TT3埋土、しまりを欠く。5mm～5cm大の粘土ブロックを多く含む。木片をやや多く含み、5mm大の炭化粒を少々含む。
②黒褐色土（10YR3/2）　粘質土、しまりを欠く。表土、撹乱を受けており、所々粘土ブロックを有する。
③にぶい黄褐色土（10YR4/3）　粘質土、しまりを有す。地山層。
地山　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　粘質土、しまりを有す。2mm～1cm大の小礫を多く含む。5mm大の炭化粒を少々含む。

0　1m
1：20

第19図　北調査区最上段トレンチ土層断面



第20図　北調査区遺物出土状況

5　検出された遺構

A　1号土坑（第13図）

1号土坑は、南曲輪2段の南曲輪のベルトに南壁に接したH3－42に位置している。表土を除去した結果、周囲よりも暗い細長い楕円形の拡がりが検出されたため、土坑として調査を行った。

長軸1.95m、短軸0.55mの長楕円形で、主軸方向はN－45°－Wを測る。底面は凹凸に富み、南東端が深く、遺構検出面からの深さは0.5mを測る。壁は外傾して立ち上がり、覆土は3層に分層され、灰褐色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積する。遺物は出土していない。

幅狭の土坑と思われたことから、検出当初は陥穴の可能性を想定したが、底面が一定でなく人為的な構築物と判断することはできない。木根の痕跡であったと考えられる。　**木根の痕跡**

B　1号石組跡（第14図）

1号石組跡は、北曲輪のB列2段とC列3段の間に構築された石を組み合わせた遺構で、グリッドではH2－37と同38の境界付近に当たる。表土を除去した結果、5個の自然礫を配置した状況が観察された。この場所は比高差1m程度の崖線となっており、平べったい自然礫を2個並列させた直上に、更に平べったい大形の砂岩（第22図1）を乗せて、石段にしたものと考えられる。またその周囲にも大きい礫を配置している。構築時期は判然としないが、近世～近代にかけての所産と考えられる。

第22図2は平べったい泥石で、崖線である東面に根の化石痕が露頭していた。この区域の地山面には大きな礫は含まれておらず、調査区域外から搬入して石段を構築したと考えられる。　**根の化石痕**

6　出土遺物（第20～26図）

本調査区から出土ないしは採集された遺物は多くはない。第21～26図に提示した多くは北調査区から出土した遺物であるが、それ以外の区域から出土した遺物も含んでいる。北調査区の遺物の出土状況については、第20図に示している。

北調査区では近代の磁器をはじめとして、石製品・銭貨等が採集された。縄文時代～近代の所産であるが、中山城跡との関連を窺わせる16～17世紀の遺物は認められなかった。

A　石器・石製品・銭貨（第21～23図）

第21図1は、縄文時代の硬質頁岩製の石鏃である。北調査区最上段のトレンチ3から出土したが、2004年山形県教育委員会が実施した試掘調査のトレンチ埋土から出土した。埋土から出土したことから判じて、この近辺の平坦地に存していたと見なされ、本遺跡が縄文時代の狩猟地として利用されていたことを窺わせる。　**硬質頁岩製の石鏃**

第21図2～5・7・8は、縄文時代の石器製作時の剥片と考えられる。石材はいずれも硬質頁岩で、2が南曲輪3段、3が南曲輪2～3段、4が北曲輪C列8段、5が北調査区最上段のトレンチ2と同3の間、7が北曲輪A列5段、8が南曲輪2～3段と、北調査区一帯で採集された。　**剥片**

第21図6は、緑色凝灰岩製の砥石状の石製品で、遺跡内からの表採資料である。四面が作出されているが、平坦面は背面と右面のみで、その他は凹凸を有し、磨痕は認められない。

第22図１・２は、１号石組跡（第14図）の石組みに用いられた平べったい礫である。１が砂岩、２が泥岩で、後者の一側面には根の化石痕が観察される。いずれも自然礫を石段にするため、調査区域外から搬入したと考えられる。板状の形状であることから、粗い整形が加えられた可能性があるが、明確な磨痕や叩打痕は認められない。１は長軸35.3cm、短軸28.5cm、厚さ6.9cm、重量7.8kg、２は長軸21.2cm、短軸16.5cm、厚さ8.5cm、重量４kgを測る。

第23図１は粘板岩製の石板の破片資料で、北曲輪のD列３段から採集された。近代の所産であろう。

第23図２・３は、縄文時代の石器製作時の剥片と考えられる。石材はいずれも硬質頁岩で、２は遺跡内からの表採、３は北曲輪E列２段で採集された。

水　晶　第23図４は、水晶製の石製品である。北曲輪B列２段から表土除去の時点で出土した。六角柱錐の自形結晶で、錘面は鈍く潰れている。半透明であるが不純物が混じり、紫灰色（５ＲＰ６／１）を呈する。

第23図５は、石英製の剥片で、白色を呈する。外皮が見られ、外殻に当たるためか剥離面は鋭くない。石器の材料として搬入されたのであろうか。

石　筆　第23図６～８は、近代の石筆である。いずれも欠損品であるが、一端を残している。石材はまちまちで、６が緑色凝灰岩（径６㎜）、７が蛇紋岩（径7.5㎜）、８が珪質流紋岩（径５㎜）と思われる。第23図１の石板とセットをなすものであろう。

寛永通宝　第23図９は「寛永通宝」である。北調査区北曲輪A列７段と同８段の境界の崖線の上部（７段の直下）から出土した。径28㎜、厚さ1.2㎜、重量4.02ｇを測り、外縁の一部を欠損する。中央に６㎜四方の穴が穿たれている。色調は暗オリーブ灰（５ＧＹ４／１）で、真鍮乃至は銅製と思われ、緑青が付着する。表面には「寛永通貨」の文字が上下右左の順に刻印され、裏面には11波の波形が刻まれた４文銭である。波形が11波であることや高品質な鋳造品でないことから、寛永通宝の中でも新しい部類に属し、幕末頃の銭貨と考えられる。

十銭白銅貨　第23図10は「十銭白銅貨」で、北曲輪D列３段から採集された。昭和16年（1941年）鋳造が記されている。径は22㎜、厚さ1.5㎜、重量1.48gで、色調は灰白色（Ｎ８／０）を呈する。

Ｂ　土器・磁器・瓦類・鉄製品（第24～26図）

第24・25図が北調査区南曲輪、第26図（第26図１を除く）が北調査区北曲輪から出土した磁器である。いずれも近代の所産であり、中山城跡との関連を窺わせる16～17世紀の遺物は出土していない。

第24図１～９は、南曲輪及びその直上の北調査区最上段から出土した磁器である。２・３は最上段のトレンチ２の東壁際から出土したが、胎土がやや灰色を呈することから、在地系の磁器と判断される。その他は近代の瀬戸・美濃系の磁器である。

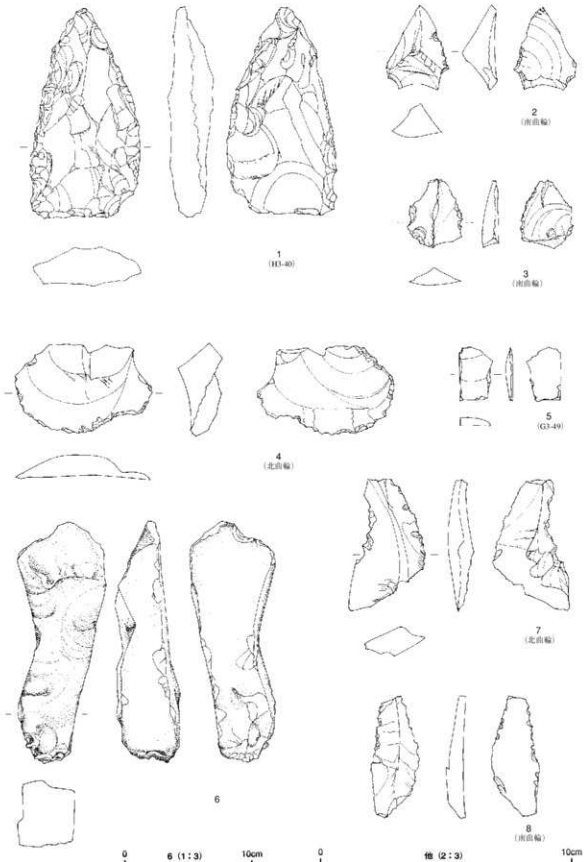
瀬戸・美濃系の磁器

第26図１は北調査区最上段のトレンチ２の北東隅、同図３は北曲輪D列６段から出土した。いずれも淡色の染付が見られ古伊万里の皿の可能性が考えられたため、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館館長）に鑑定を依頼したところ、19世紀の在地系の磁器であるとの教示を得た。

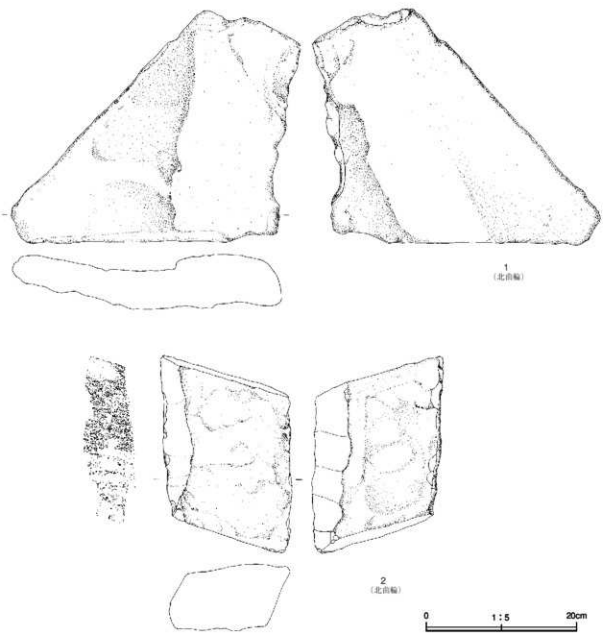
19世紀の在地系の磁器

第26図２・４は、北曲輪C列７段で採集された近代の瀬戸・美濃系の磁器である。第26図６は、北曲輪のE列２段から採集されたが、胎土が灰色を帯びることから、近代の在地系磁器の仏飯器と思われる。

在地系磁器の仏飯器



第21図　遺物実測図

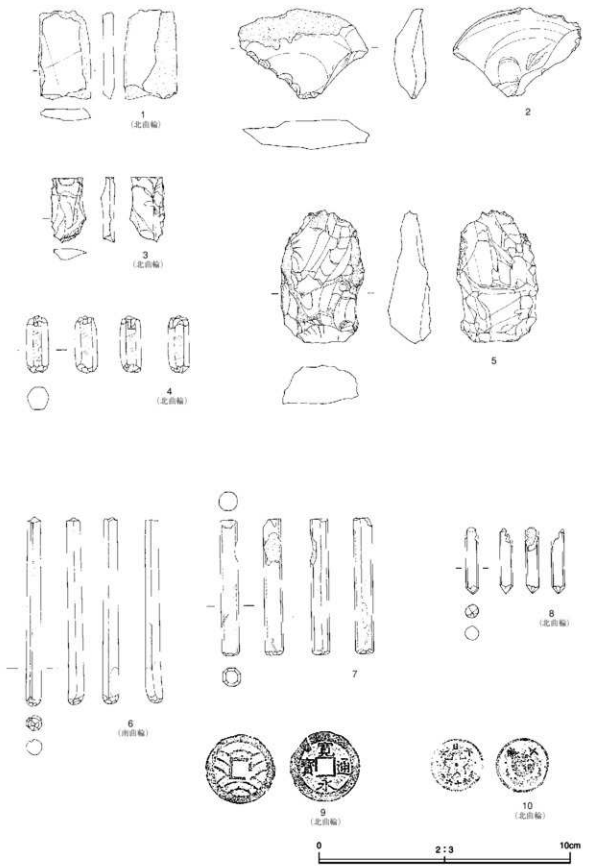


第22図　遺物実測図

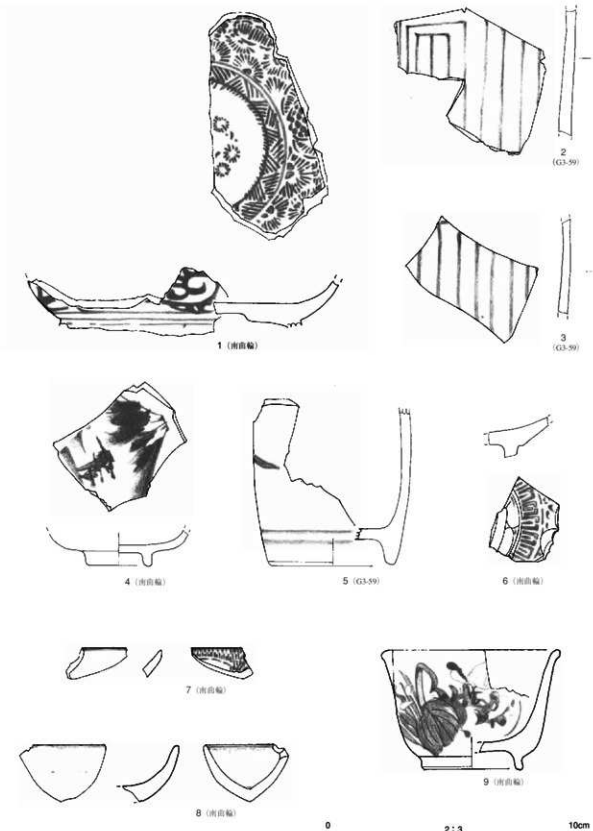
須恵器甕　第26図５は、古代の須恵器甕の体部上半の破片資料で、北曲輪Ａ列３段の南端直下で採集された。表面には平行タタキの後に轆轤によるナデが加えられ、内面にはアテ痕が認められる。胎土は緻密で細砂粒が含まれ、焼成は良好で堅緻である。色調は灰色（Ｎ４／０）を呈する。

瓦　第25図は、瓦の破片資料である。南曲輪２段の南側延長部のＨ３－62で採集された。厚さ1.95cm、重量80.02ｇを測り、色調は灰色（５Ｙ４／１）を呈する。表面の簾状圧痕は乾燥時に付いたもので、円孔は釘留めである。近代の所産と思われる。

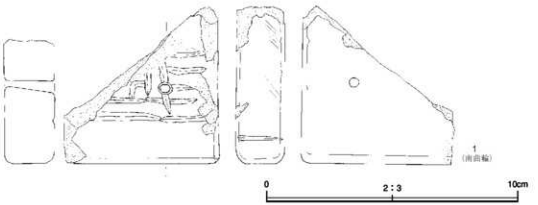
環状の鉄製品　第26図７は、環状の鉄製品である。径5.2～5.3cm、孔径2.15cm、最大厚８mm、重量は42.57ｇを測り、表面は錆びており、色調は褐色（7.5ＹＲ４／３）を呈する。製品の内容は判然としないが、腐蝕の度合いから近代の所産と考えられる。



第23図　遺物実測図



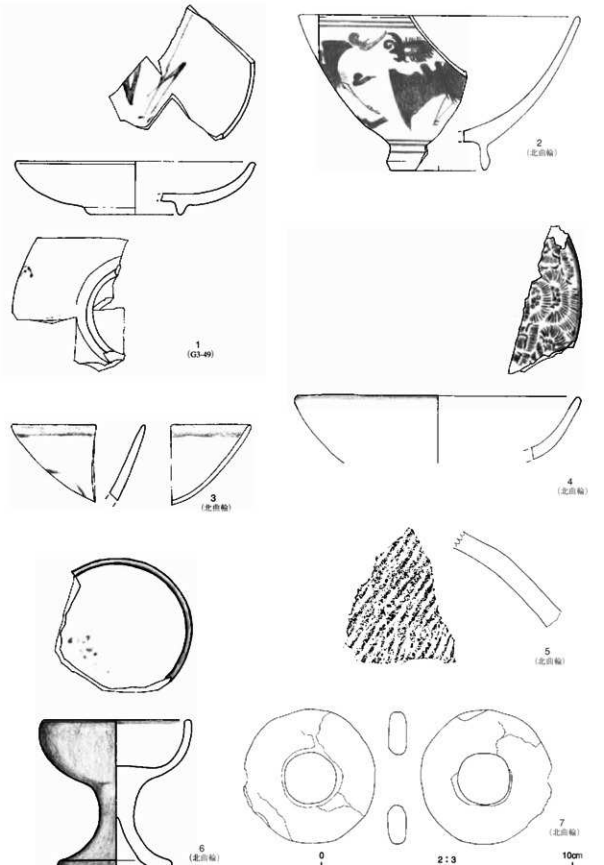
第24図　遺物実測図



第25図　遺物実測図

表2　石器観察表

	挿図番号	写真図版	遺物番号	器種	出土位置	長軸mm	短軸mm	厚さmm	重量g	石材
1	第21図1	図版17	RQ73	石鏃	H3－40	83	43	15	49.68	硬質頁石
2	第21図2	図版17	RQ56	剥片	南曲輪3段	31	24	13	6.38	硬質頁石
3	第21図3	図版17	RQ53	剥片	南曲輪2・3段	26	22	7	3.46	硬質頁石
4	第21図4	図版17	RQ03	剥片	C列8段	53	34	8	16.21	硬質頁石
5	第21図5	図版17	RQ83	剥片	G3－49	21	13	3	1.16	硬質頁石
6	第21図6	図版17		石製品	表採	187	67	52	553.9	緑色凝灰岩
7	第21図7	図版17	RQ32	剥片	A列5段	51	23	10	9.54	硬質頁石
8	第21図8	図版17		剥片	南曲輪2・3段	46	19	7	5.08	硬質頁石
9	第22図1	図版17	RQ117	石製品	1号石組跡	353	285	69	7757	砂石
10	第22図2	図版17	RQ116	石製品	1号石組跡	212	165	85	4034	泥石
11	第23図1	図版17	RQ19	石製品	D列3段	35	20	4	5.35	粘板石
12	第23図2	図版17		剥片	表採	50	35	11	18.3	硬質頁石
13	第23図3	図版17	RQ12	剥片	E列2段	26	13	4	2.27	硬質頁石
14	第23図4	図版17	RQ31	石製品	B列2段	(23)	9	9	2.49	石英（水晶）
15	第23図5	図版17		剥片	表採	53	32	14	28.82	石英
16	第23図6	図版17	RQ113	石製品	南曲輪2段	(75)	6	6	2.57	緑色凝灰岩
17	第23図7	図版17		石製品	表採	(54)	7	8	4.25	蛇紋岩
18	第23図8	図版17		石製品	E列1段	(16)	5	5	1.06	注質流紋岩



第26図　遺物実測図

Ⅲ　南調査区の成果（第10・11図）

南調査区は遺跡の南端に相当し、中山城跡に面する南方向に張り出した半島状の丘陵の末端に構築されている。

本調査区の調査は、2005年９月７日～10月27日までの実働30日間で実施した。調査面積は3,000㎡で、北東側には地すべりが危惧される地割れが認められたため、事業主である国土交通省によって応急工事が実施されており、危険を回避するためそれ以南を調査範囲とした。調査区の南西端は私道が開削されており、その南側は白鷹山系から東流する横沢によって深く刻み込まれており、中山城跡の遺跡範囲と画されている。斜面の上方は緩斜面となっているが、1970年頃に果樹園（ブドウ園）が造成されたためで、それ以前は帯曲輪が存在していたという。

調査区内には地すべりの痕跡が随所に認められた。特に北側中央の斜面上位は地表が抉れ、現在も崩落の危険が予見された。また旧地権者からこの30年間に何度も地すべりがあり、その都度土砂を整地して、段々の畑にしてきたとの教示を得た。従って現在の地形は帯曲輪の様相を正確に反映していない可能性が考えられた。更に用地買収後も農地として耕作が続けられており、収穫まで調査に着手することができなかった。この区域は人家が近く、調査開始前にも雨天時の土砂流出の連絡を周辺住民から寄せられていた。当初土層断面を観察するためのトレンチ開設を企図したが、土砂流出等で住民の不安を煽りかねないこと、また傾斜に直交したトレンチが、鉄砲水を誘発する可能性が予見されたことから、表土除去等の現況を改変することは断念し、現状の地形測量のみを実施することで、関係機関との調整をはかり了承を得た。

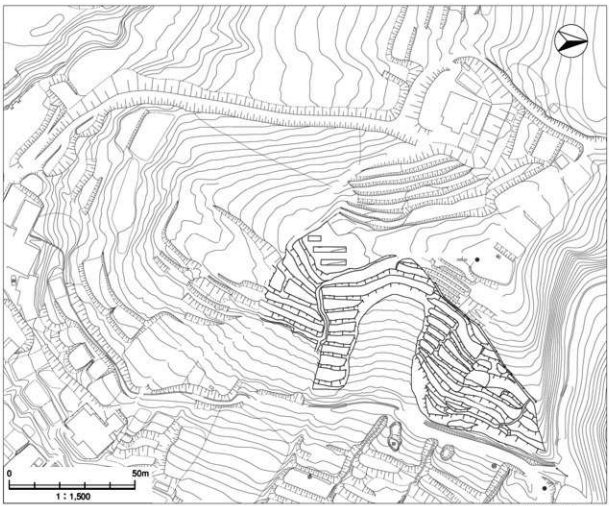
地形測量

南調査区は、最上段の面の標高が281ｍを測り、下端の私道の標高は260～267ｍの範囲にある。従ってその比高差は最大で21ｍを測る。上端は中山城跡方向の南西と米沢街道方向の南東を向くように鉤状に帯曲輪が構築されていた。特に国土交通省が地すべり対策工事を施した南東面の延長部分は４段の帯曲輪が整然と巡らされており、工事部分を介して北調査区の南曲輪に続いていたと想定される。また５段目以下は緩斜面となっており、人家裏の農地へと続いている。南西側の曲輪は、上位２段までは平坦面も認められたが、それ以下は地すべりが頻発に生起しており、比高6.5ｍの差急峻な崖線となっている。その直下は標高272ｍ前後のやや広大な平坦地で、耕作地となっているが、流出した土砂をならすなど、人為的な改変が加えられた結果と考えられる。それ以下にも３～７段の狭小な帯曲輪が交互に構築されているが、いずれの面も狭い耕地となっていた。

４段の帯曲輪

３～７段の狭小な帯曲輪

本調査区は、中山城跡を臨むように構築されている。丁度前森山の帯曲輪と対向しており、その間の横沢を通って中山城跡に攻め入る勢力に対抗するために構築された可能性が想定される。本調査区は現況を測量したのみで、遺物は採集されておらず、時期を特定する根拠は存在しない。しかし中山城跡を防備するための役割が想定され、本調査区の北西側の斜面にも帯曲輪が存することから、半島状に突き出た丘陵全体に帯曲輪が構築されていたことになろう。



第27図　上ノ山館跡縄張り図

Ⅳ　調査の総括

上ノ山館跡は、中近世の城跡として1995年に登録されたが、今回の調査は一般国道13号上山バイパス改築事業にかかわる発掘調査として、2005年５月17日～11月４日までの実働114日間で実施された。

上ノ山館跡は自然の丘陵を利用して構築された館跡で、調査範囲は10,000㎡に及ぶが、今回の調査では北から南に突き出た半島状の丘陵全体に、階段状の帯曲輪が巡らされていたことが確認された。しかし曲輪に伴うと考えられる遺構は検出されず、また調査区内では耕作や地すべり等により、元々の地形が改変され、発掘調査に至らなかった区域も存した。遺物としては、縄文時代の石器、古代の須恵器、近代の磁器や石製品等が採集されたが、中山城との関連を窺わせる16～17世紀の遺物は認められなかった。

階段状の帯曲輪

上ノ山館跡の性格として、置賜と最上の境目にあって北からの攻撃から中山城を防備するための前線基地としての役割が考えられる。丘陵全体に帯曲輪が巡らされており、北調査区は掛入石方面からの侵入に備えた施設、南調査区は前森山との間から中山城本体に攻め込む勢力に対する防御の施設であったと考えられる。また半島状の丘陵の付け根の北西斜面にも帯曲輪が構築されており、中山城直下が主戦場になることを想定して構築されたことが窺える。しかし今回の調査では、曲輪に伴うと思われる遺構が検出されなかったことから、階段状の改変は地すべりを防ぐための土留め的な役割を果たしていたとも考えられる。該城は地すべり地帯で、斜面の下方に暮らす住民にとっては、地すべりに対して何らかの対策が求められたであろう。丘陵一帯に階段状の整地がなされたのは、軍事上の要請だけでなく、近代においては防災対策も兼ねていた可能性が考えられる。以上のように、中山城と上ノ山館跡、それに東方の物見山楯跡は三位一体の関係にあり、米沢街道を南下してくる最上勢に断固立ちはだかる境目の城となっていたと考えられる。

防災対策

三位一体の関係

最後に、調査に際し御指導・御協力をいただいた地元の方々をはじめとする関係各位、また発掘から報告書作成までの作業に従事していただいた作業員の皆様に対し、深甚なる謝意を表します。

引用文献

阿子島功・米地文夫ほか　1983『Ⅱ　地形分類』『土地分類基本調査　赤湯・上山』　pp15－34　山形県
伊藤清郎ほか　2003『中世の城郭　中山城　中山城跡調査報告書』　上山市教育委員会
生出慶司・中川久夫・蟹沢聰史編　1989『日本の地質２　東北地方』　日本地質『東北地方』編集委員会編　共立出版
大泉善太郎・高柳健一　2005『上山城跡発掘調査報告書』上山市埋蔵文化財調査報告書第５号　上山市教育委員会
柴田　徹　1991「考古学のための岩石鑑定ミニ図鑑－王子台遺跡出土石器をもとにした－」『東海大学校地内遺跡調査団報告２』　東海大学校地内遺跡調査団
中山知子・宮城豊彦　1984「閉鎖系堆積物からみた最終氷期中葉以降の環境変化と斜面発達過程－山形県川樋低地－」『東北地理』第36巻第１号　pp.25－38　東北地理学会
守田益宗・日比野紘一郎　1994『Ⅲ　自然の移り変わり　２　古気候と植生の移り変わり』『仙台市史　特別編　１　自然』　pp.278－345　仙台市史編さん委員会編集
山形県教育委員会　1996『山形県中世城跡遺跡調査報告書　第２集（村山地区）』　山形県教育委員会
山形県教育委員会　2006『分布調査報告書（32）』山形県埋蔵文化財調査報告書第206集　山形県教育委員会

付　編

上ノ山館跡発掘調査報告書

付録 CD-ROM 操作マニュアル

付録 CD-ROM をお使いになる前に、この操作マニュアルをご一読ください。

付録 CD-ROM をご覧いただくために必要な環境

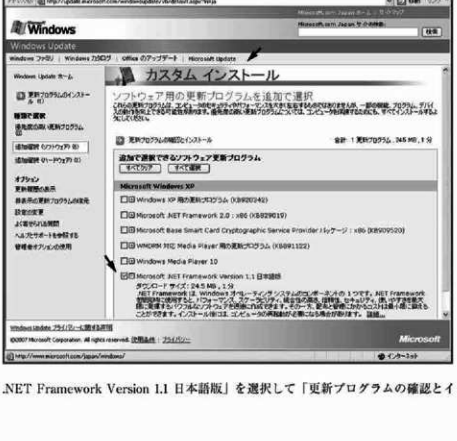
・ Windows パソコンが必要です。稼働環境は下表の通りです。

	WindowsXP	Winddows2000
CPU	Pentium 相当 300MHz 以上	Pentium 相当以上
必要メモリ	128MB 以上（256MB 以上推奨）	64MB 以上（128MB 以上推奨）
ディスプレイ	800 × 600pixel/16Bit color 以上	640 × 480pixel/256 色以上 (800 × 600pixel/16Bit color 以上推奨)
CD-ROM ドライブ	2 倍速以上	

・実行環境として.NET Framework1.1 以上、XVL プレイヤー、SVG ビューワー（これらの実行環境をインストールする際には、インターネットへの接続が必要になります）。
・付録 CD-ROM を、CD-ROM ドライブに挿入してください。プログラムが自動的に起動し、実行環境のチェックを行います。
・下記のダイアログほかエラーが表示された場合、.NET Framework1.1 以上がインストールされていない可能性があります。

・.NET Framework1.1（以上）は「Microsoft Update」の "カスタム" 更新プログラムをご利用のうえ、事前にインストールしてください。

「Microsoft Update」 http://update.microsoft.com/microsoftupdate/



「Microsoft .NET Framework Version 1.1 日本語版」を選択して「更新プログラムの確認とインストール」をクリック

・パソコンにXVLプレイヤーおよびSVGビューワーがインストールされていない場合、付録CD-ROMをCD-ROMドライブに挿入した際に案内が表示されますので、その案内に沿ってインストールを行ってください。

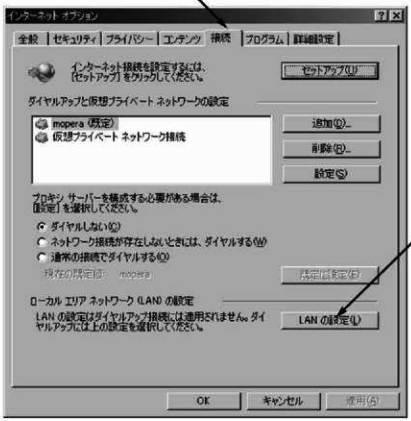
・.NET Framework1.1、XVLプレイヤー、SVGビューワーのインストール方法その他詳細は、各アプリケーションのヘルプまたはマニュアルをご覧ください。

・お使いのパソコンのネットワーク設定によっては、付録CD-ROMをご覧いただけない場合があります。その際は、下記の通り、ネットワーク設定の変更を行ってください。

①付録CD-ROMを起動した際、この表示が出た場合は、「OK」ボタンをクリックしてアプリケーションを終了させます。

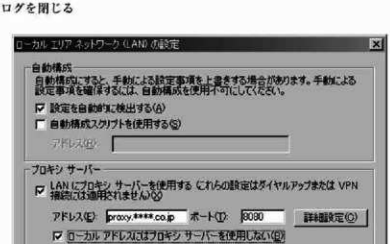
②ブラウザ（Internet Explorer）を起動し、「ツール」＞「インターネット・オプション」をクリック

③「接続」タブを選択し、「LAN の設定」をクリック

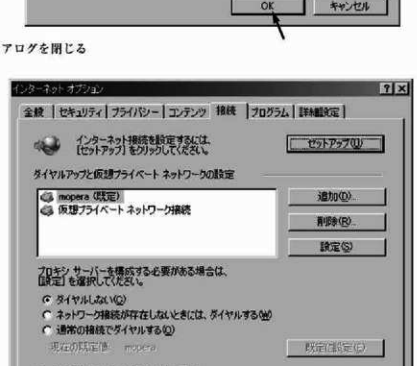


④「ローカルアドレスにはプロキシサーバを使用しない」をチェック

⑤「OK」でダイアログを閉じる



⑥「OK」でダイアログを閉じる



⑦付録 CD-ROM を再び起動してください。

・その他、組織内（会社、学校等）のパソコンをご利用の方で、所属組織のセキュリティ・ポリシーに反する恐れがある場合は、所属組織のセキュリティ管理責任者にご相談ください。

付録 CD-ROM の起動のしかた

・パソコンを起動し、「上ノ山館跡発掘調査報告書 付録 CD-ROM」を CD-ROM ドライブにセットしてください。しばらくすると自動的にスタートします。
・自動的にスタートしないとき、もしくは、いったん終了した「上ノ山館跡発掘調査報告書 付録 CD-ROM」が CD-ROM ドライブ内にセットされたままであるときは、次の方法でスタートしてください。
① Windows の「スタート」ボタンを右クリックすると表示されるショートカットメニューから、「エクスプローラ」をクリックしてください。
②「エクスプローラ」の左側のウィンドウ内の「マイ コンピュータ」をクリックしてください。
③ ウィンドウの右側に表示される CD-ROM ドライブのアイコンをダブルクリックしてください。
④ しばらくすると、「上ノ山館跡発掘調査報告書 付録 CD-ROM」がスタートします。

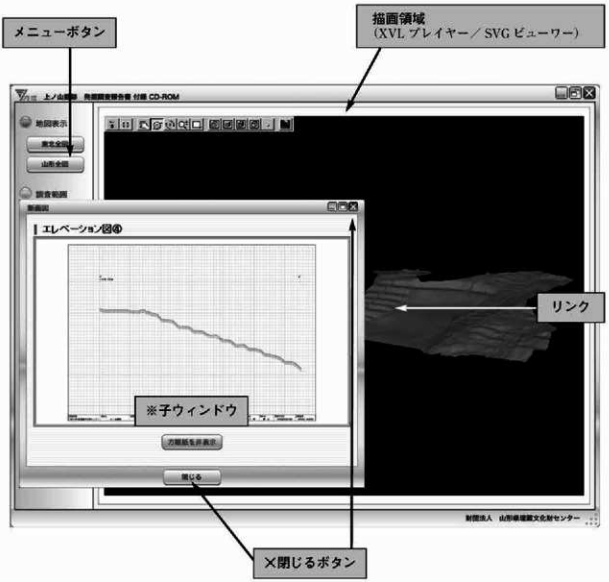
付録 CD-ROM の取扱い上のご注意

・このディスクは「CD-ROM」です。一般オーディオ用 CD プレイヤーで絶対に再生しないでください。大音量によって耳に障害を被ったり、スピーカーを破損する恐れがあります。
・直射日光が当たる場所や高温、多湿の場所に放置しないでください。
・ディスクは両面とも、指紋、汚れ、キズなどをつけないように取り扱ってください。ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布か、市販の CD クリーナーで、内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや洗剤などは使用しないでください。
・ディスクは両面とも、鉛筆、ボールペン、油性ペンなどで文字や絵を書いたり、シールなどを貼付しないでください。
・ひび割れや変形、または接着剤などで補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないでください。

付録 CD-ROM ご使用の手引き

※ CD-ROM の各画面は、実際の画面と多少異なる場合があります。

・メニューボタン、もしくは描画領域内のリンクをクリックのうえ、各コンテンツをご覧ください。子ウィンドウを閉じる場合は、右肩の×印、もしくは下部の「閉じる」ボタンをクリックしてください。



・描画領域内の地図や写真、および三次元情報は、メニューボタンもしくはリンクをクリックしたあと、XVL プレイヤーまたは SVG ビューワーにより描画されます。パソコンの性能等により、この描画には少し時間がかかる場合がありますので、そのまま少しお待ちください。

・ XVL プレイヤー、および、SVG ビューワーは、拡大・縮小・パンなど各種の操作が可能です。詳しくは、それぞれの画面を右クリックすると表示されるメニューから、「ヘルプ」にてご確認ください。

XVL プレイヤー

SVG ビューワー

付録 CD-ROM の終了のしかた

・親ウィンドウの、右肩の×印をクリックしてください。「上ノ山館跡発掘調査報告書 付録 CD-ROM」を終了します。

「上ノ山館跡発掘調査報告書 付録 CD-ROM」に関するお問い合わせ先

○調査内容等に関すること
財団法人山形県埋蔵文化財センター
TEL 023-672-5301
○CD-ROM の機能・操作等に関すること
株式会社セビアス
uenoyama@sabaoth.co.jp

●禁止事項

・次の事項を禁止します。

1 当 CD-ROM および複製の全部または一部を改変したり、第三者に譲渡、販売、頒布、公開すること（インターネットなどのネットワークを通じて通信により提供することを含む）。

2 当 CD-ROM に表示されているクレジット、および、その他権利者の表示を削除したり改変を加えること。

●免責事項

1 財団法人山形県埋蔵文化財センターおよび株式会社セビアスは、当 CD-ROM に関する、使用者の責による物理的破損、経年による物理的劣化、およびそれに類する破損・劣化に対して責を負いません。

2 財団法人山形県埋蔵文化財センターおよび株式会社セビアスの保証は、明示された稼働環境および実行環境での当 CD-ROM の使用のみであり、当 CD-ROM の品質、機能、性能に関するリスクを負うものではありません。また、当 CD-ROM を使用した結果については、ご自身の責任とさせていただきます。

● Microsoft、Windows、WindowsXP、Windows2000、.NET Framework は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
● Pentium は、米国 Intel corporation の商標です。
● XVL はラティス・テクノロジー株式会社の登録商標です。
● SVG ビューワー（Adobe SVG Viewer）は Adobe Systems Incorporated （アドビ システムズ社）の商標です。
●その他記載の会社名、システム名、製品名は、各社の商標または登録商標です。なお、本書では TM や® などの表記はしておりません。

写真図版

北曲輪南半部完掘状況（南から）

北曲輪完掘状況（南東から）

遺跡遠景（南東から）

南曲輪作業風景（北から）

調査区内伐採木残存状況・2005/4/12（南西から）

北曲輪 A ～ B 列清掃状況（南東から）

調査区内伐採木搬出（北から）

調査区内環境整備状況（北東から）

調査区内環境整備状況（南西から）

遺跡近景（東から）

遺跡遠景（南東から）

北曲輪清掃終了状況・西側（南から）

北曲輪清掃終了状況・東側（南西から）

調査区全景（東から）

調査区全景（南から）

調査区全景（南西から）

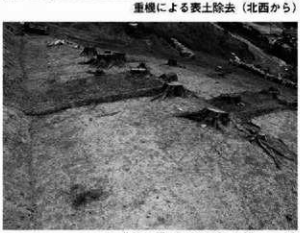
調査区全景（北西から）

調査区内鉄板敷設状況（北から）

地形測量のためのラジコンヘリによる空中撮影

重機による表土除去（北西から）

南曲輪１・２段目表土除去・面整理風景（北から）



南曲輪３段目面整理終了（南西から）

南曲輪６段目面整理終了（北から）

北曲輪Ｂ列１段礫検出状況（北西から）

北曲輪Ｄ列３段石版（23-1）出土状況（西から）

北曲輪 A ～ B 列面整理風景（西から）

北曲輪 A 列 9 段寛永通宝（23-9）出土状況（南東から）

北曲輪 B 列 5 段（23-7）石筆出土状況（西から）

北曲輪 B 列 2 段石組み（22-1 ・ 22-2）検出状況（北東から）

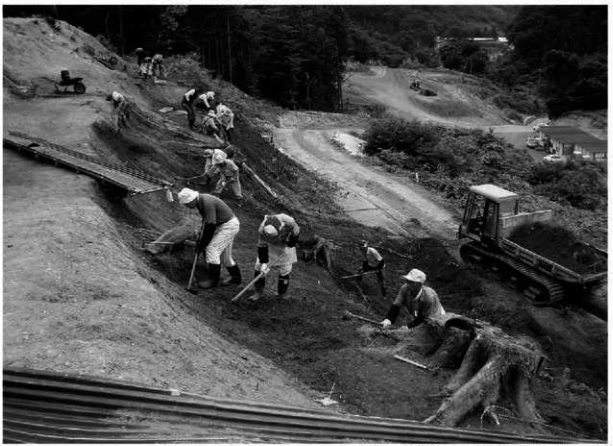
北曲輪 B 列 2 段石組み　木根化石検出礫（22-2 ・北東から）

平板による遺構平面図作成

遺構図作成用遺構写真撮影

南曲輪面整理作業（北東から）

座標計測作業



北曲輪Ｃ～Ｅ列面整理風景（南西から）

北曲輪北半部完掘状況・北東端から（北東から）

北曲輪北半部完掘状況・北曲輪Ｅ列２段から（北東から）

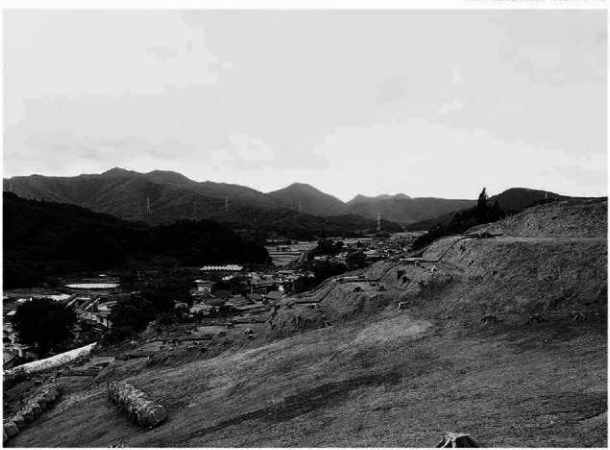
北曲輪南半部完掘状況・西側（南から）

北曲輪南半部完掘状況・東側（南西から）

北曲輪完掘状況・東側（南西から）

北曲輪完掘状況・西側（南から）

南曲輪完掘状況（北東から）



南曲輪完掘状況・北曲輪Ｂ列２段から（北から）

南曲輪完掘状況（北西から）

最上段平坦部２トレンチ　掘り下げ風景（南西から）

最上段平坦部３トレンチ石筐（21-1）出土状況（北から）

１号土坑断面（南西から）

１号土坑完掘（南東から）

最上段平坦部トレンチ断面実測図作成

南端部東側清掃作業風景（西から）

南端部清掃終了状況（南から）

南端部清掃終了・G5-54 グリッド付近から（南東から）

南端部清掃終了・G5-54 グリッド付近から（南から）

南端部清掃終了・西端から（西から）

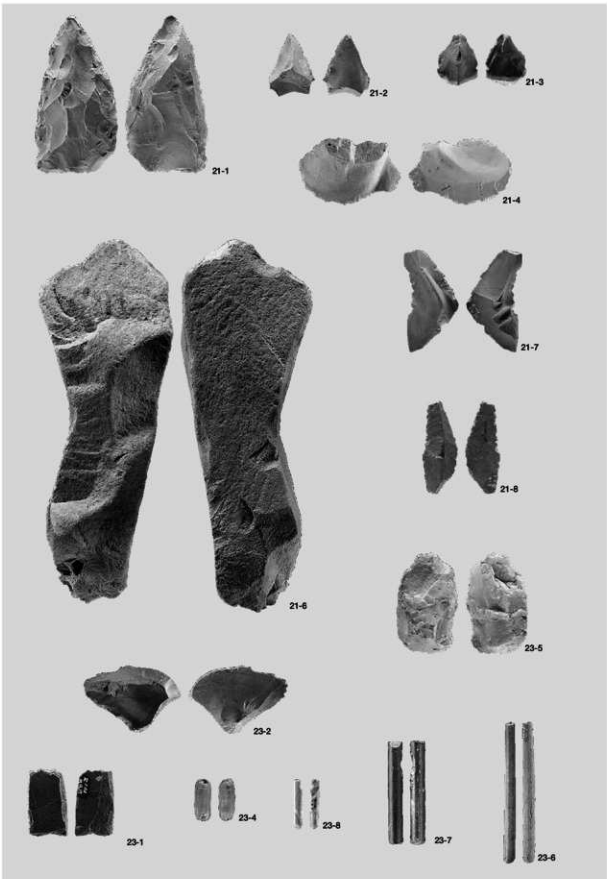
南端部清掃終了・G4-75 グリッド付近から（西から）

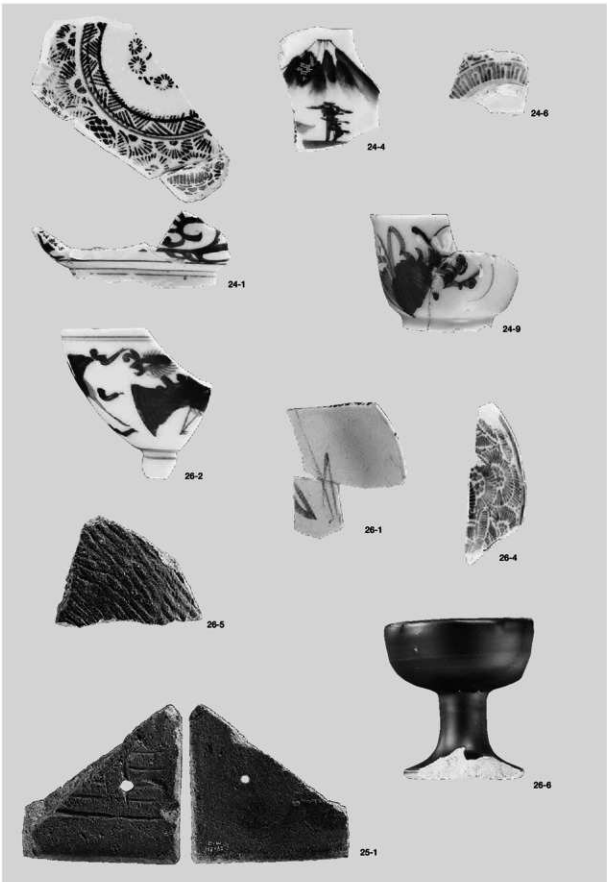
南端部清掃終了・G4 大グリッド南東部から（南東から）

最上段平坦部トレンチ完掘状況（北東から）

南端部清掃終了状況（南西から）

調査区及び周辺の航空写真


21-1
21-2
21-3
21-4
21-6
21-7
21-8
23-5
23-2
23-1
23-4
23-8
23-7
23-6


24-4
24-6
24-1
24-9
26-2
26-1
26-4
26-5
26-6
25-1

報告書抄録

ふりがな	うえのやまたてあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上ノ山館跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第157集
編著者名	小林圭一
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL　023－672－5301
発行年月日	2007年３月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺物番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
うえのやまたてあと 上ノ山館跡	やまがたけん 山形県 かみのやまし 上山市 おおみやなかやま 大字中山 あざうえのやま 字上ノ山	6207	207－002	38度 7分 37秒	140度 13分 2秒	20050517 ～ 20051104	10,000	一般国道13号線 上山バイパス改 築事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
包蔵地	縄文		石器（石鏃・剥片）	
包蔵地	古代		須恵器	
要塞	戦国	曲輪 土坑　1		中央の地崩れした部分を挟んで北と南に帯状の曲輪を検出した。
包蔵地	近世～近代	石組跡　1	石製品（石板・石筆） 銭貨（寛永通宝） 磁器片	傾斜地の石段と思われる石組跡を検出した。 （総出土箱数：５箱）

要約	置賜と最上の境目にあって、北からの攻撃から中山城を防備するための軍事施設であったと考えられる。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第157集

上ノ山館跡発掘調査報告書

2007年3月28日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　023－672－5301
印刷　大場印刷株式会社
〒990－2251　山形県山形市立谷川二丁目485－2
電話　023－686－6155（代）